図解

手裏剣術

藤田西湖著

手裏剣術目次

手裏剣代用として用いるもの……六七

手裏剣の打ち方要領……七三

手裏剣打ち方練習法(一)（立打ち）……九七

手裏剣打ち方練習法（二）（居打ち）……一二七

刀法併用手裏剣術……一四一

北斎筆

海国兵談所載

阿蘭陀人石擲
稽古之図

はしがき

武術には
素手で　打ち　突き　蹴り　組み　投げ
絞め　抑え合って闘う格闘武術　と
武器となるべき得物を持って　撃ち　突き
斬り合って闘う撃突武術　と
遠く離れた処から　器具を使わず　手で物
を投げつけて敵を倒す投擲武術　と
弓　鉄砲に類する　機具を用いて　射ち
撃って敵を斃す射撃武術　とがある
本書は　その武術のうち　投擲武術　特に
手裏剣術に関する一切の事を　初伝より奥
伝印可まで　図解説述したものである

藤田西湖

投擲武術

投擲武術とは

投擲武術には、投擲術・投槍術・打根術・手裏剣術等がある。

投擲術（飛礫術・つぶての術・石抛術ともいう）は、敵に石を投げつけていためたおす術で、その方法には、素手で投げるのと、機具を用いて投げるのとがある。素手で石を投げる石投げ術は、投擲武術の最初のもので、後の投矛・投げ槍・打根・手裏剣術の元祖ともいうべきものであり、機具（石抛器）による石抛げ法は、射撃武術の元祖でもある。

投槍術とは、投げ槍用の短槍（普通の手槍を用いることもある）をもって、敵を突いたり、投げつけて倒す術で、この投げ槍術が、手突矢、投矢（打根）となったようである。この投げ槍の一種は、銛、籍といって、今でも狩漁猟に用いられている。

打根術（討根）、手突矢・投矢は、投げ突き用の短矢をもって、敵を突いたり、投げつけて敵を倒す術で、投げ槍術より進化したものである。

手裏剣術は、手裏剣を投げ打って敵を倒す術で、投擲・投槍・打根等の術より出で、さらに進化したものである。

石抛術

石を投げ当てるということは、やさしいようでなかなかむつかしいものである。遠近によって、目標のネライ方・投げ方があり、投げる石の大小・軽重・円丸・方角・扁平によっても、みなそれぞれ持ち方投げ方があり、一様でない。

目標も、動かぬ物に投げ当てることは、さして至難のわざではないが、動く物・飛ぶもの・下がるもの・進み来るもの・走り去るものに、的確に投げ当てることはなかなかむつかしいものである。

目標のネライ方

目標よりすべて上方をネラッて、手は目標の中点まで下げるように投げる。たとえば、敵の顔面に当てようとする場合、手はアゴの下あたりまで下げるように投げるのが要領である。

投げ方も、手先だけで投げるようではいけない。肩・腕・手を目標にむかって一直線に、全身の力を一つにして、突き込むように投げるべきである。その一つでも狂えば、決して遠くえも届かず、目標にも当たらず、当たっても力なく、きくものではない。

走るものに対しては、その走る方向に、追うように横に投げるのであるが、遠近・速力の度合によって遅速があってはいけない。

上にあがるものに対しては、また上から下がってくるものに対しても、その速力・度合によっておのずから手加減がある。

左方はよいが、右方え転ずるものは具合が悪いものである。身体の開き度合によって投げるべきである。

持ち方の要領

丸めの物

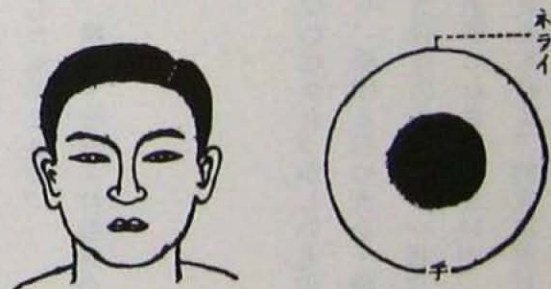
押さえる力

持つ力

物をささえる

やや大きな物

前と同じ

小さめの物

長めの物

投げ方

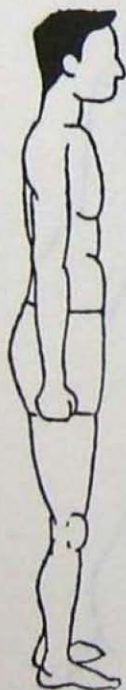
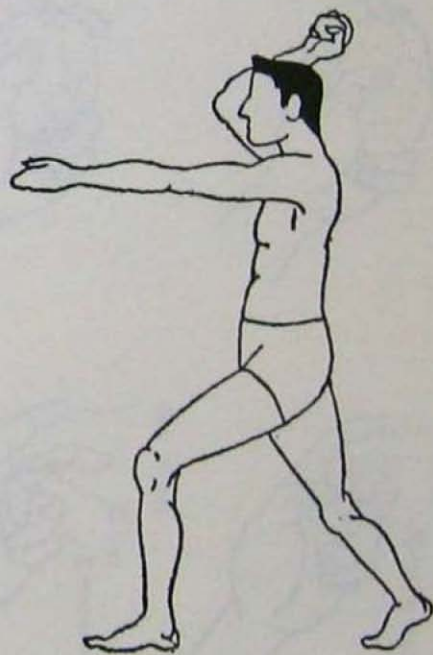
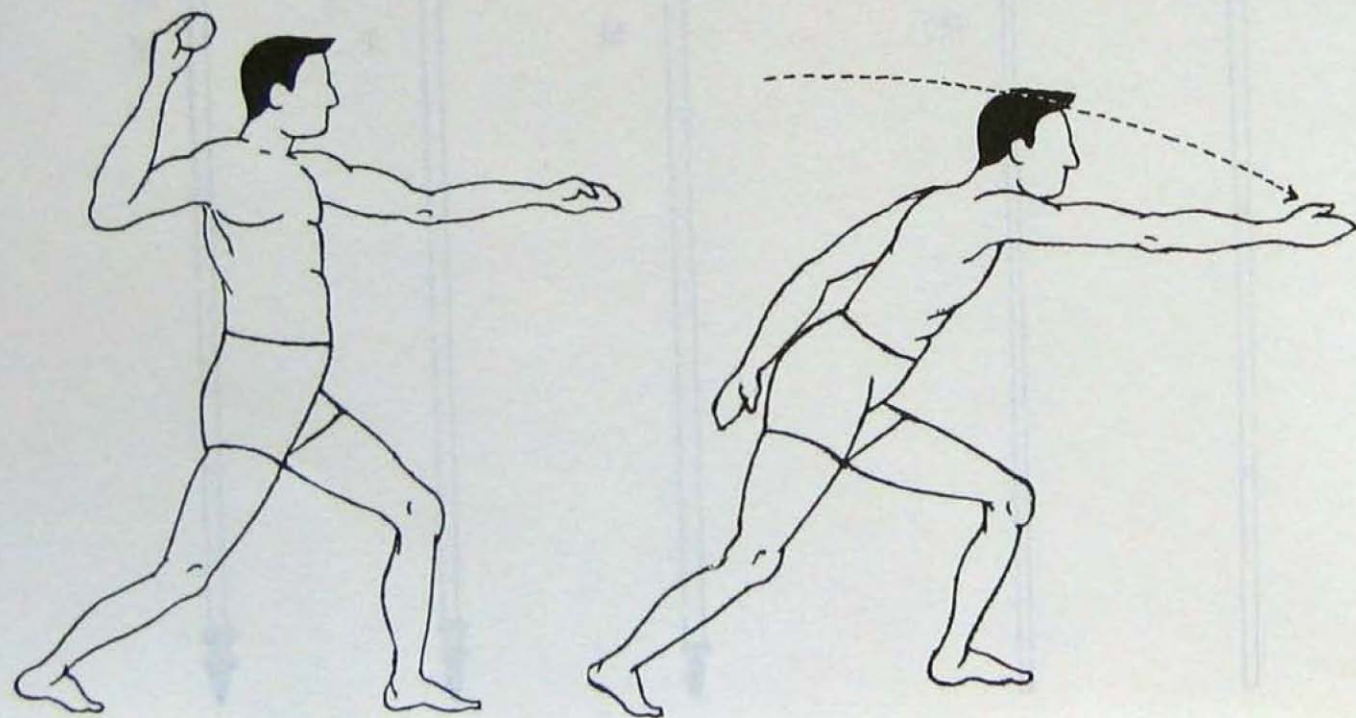
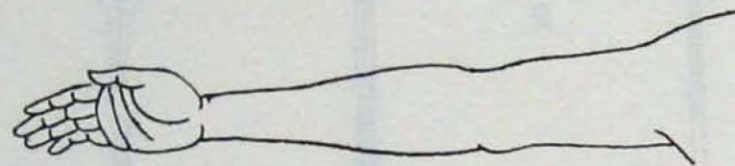
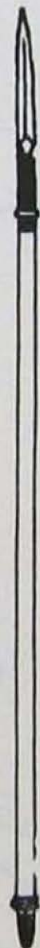
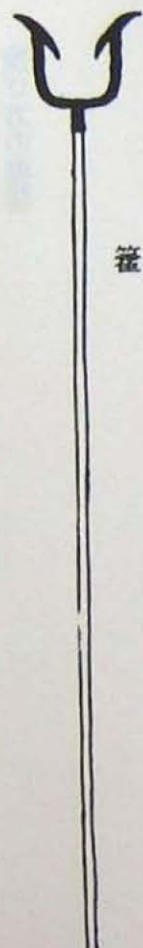
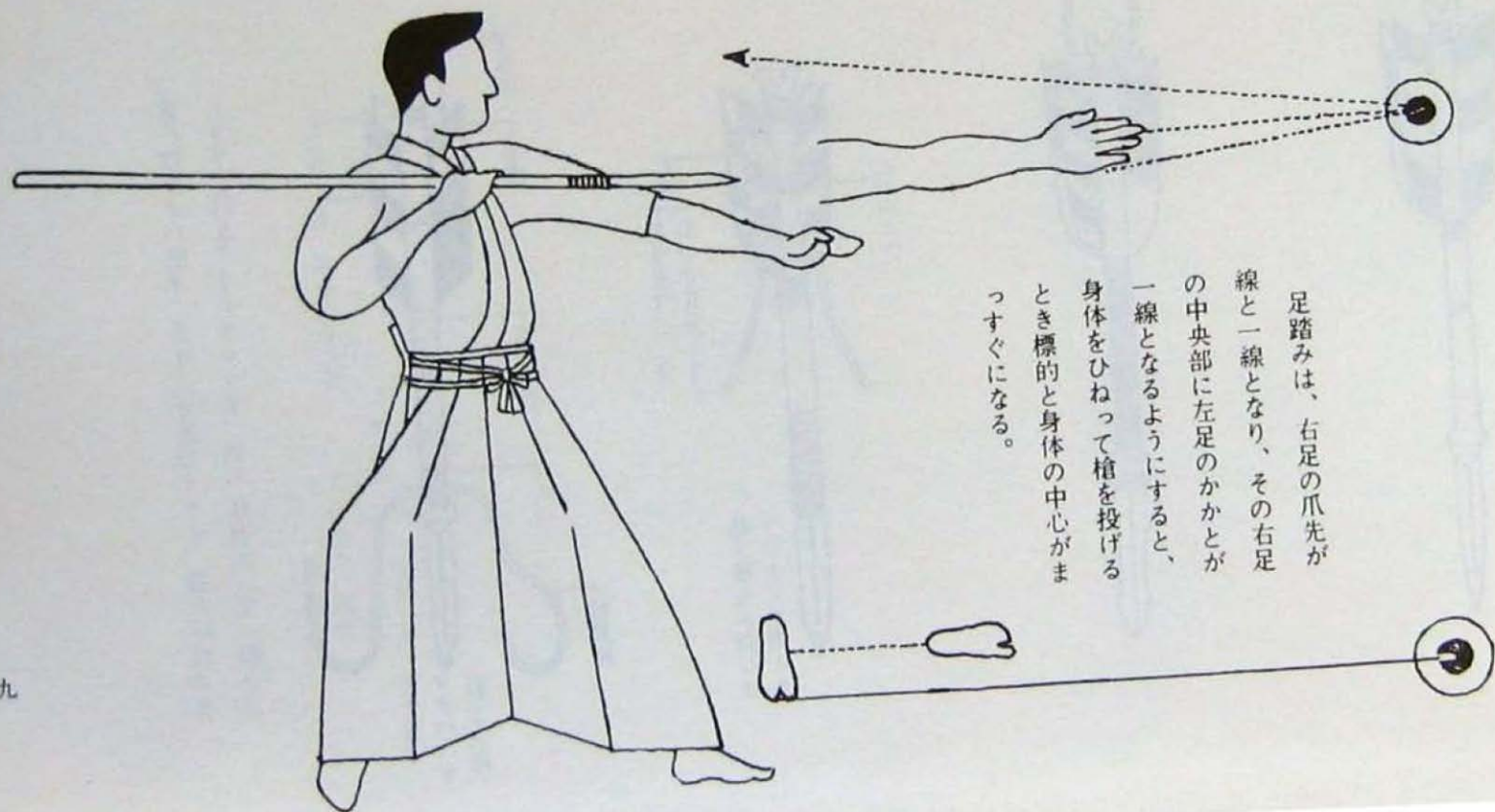
すべて投げ物はネライの場所より下に下がりがちのものである。

ネライの場所に的確に物を投げ当てるには、投げる角度(体勢)で調子を取るか、手留で調子を取るべきものである。目標と体位が正確でないと外れるし、体位が正確であっても投げ方が不正であればもちろん外れる。

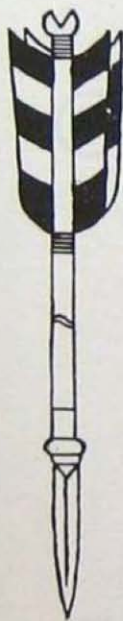
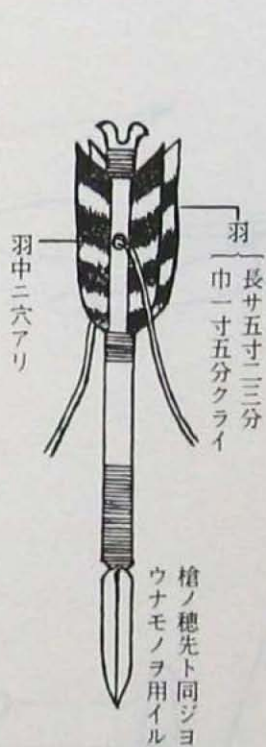
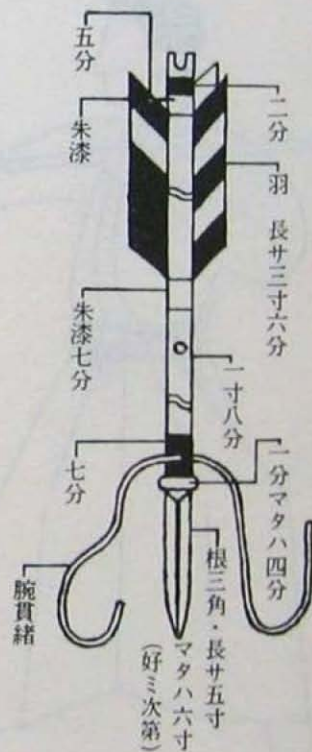
目付を正しく、足踏方向で体位をつくり、目標にむかって物を突き込むような気持で投げつける。(この場合、物の持ち方と手離れに注意することが肝要)

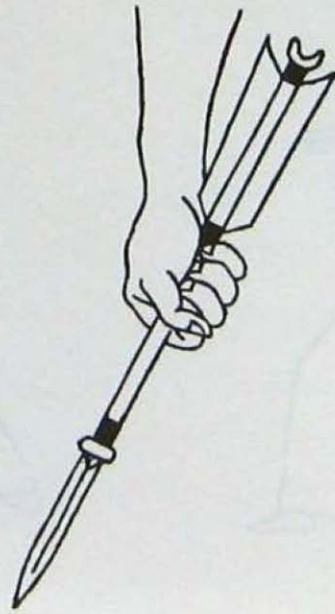
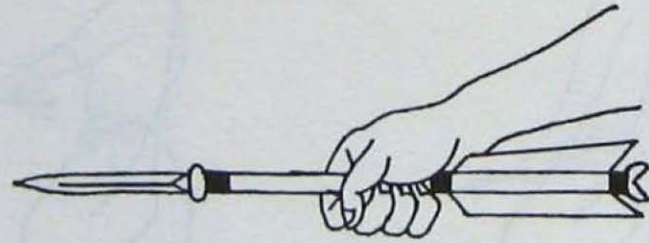
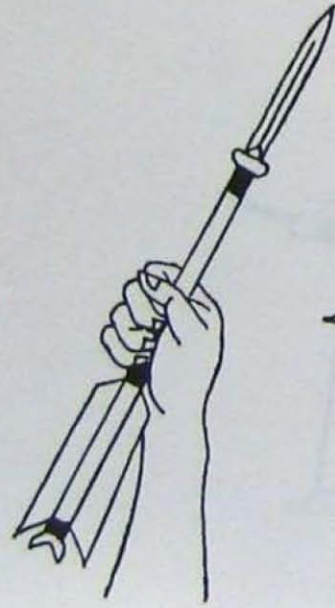
投げ方の要領

投槍

投槍要領

足踏みは、右足の爪先が線と一線となり、その右足の中央部に左足のかかとが一線となるようにすると、身体をひねって槍を投げるとき標的と身体の中心がまっすぐになる。

打根

篦ハ竹マタハ堅木、太サ二寸五分クライ、長サ一尺クライヨリ一尺五六寸クライマデ、羽ハ直羽三ツ立・四ツ立

打根の持ち方

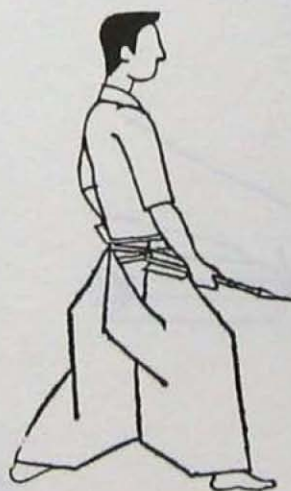
構え

突き

投げ

打根用法十五箇条

太刀合三箇条

一　附入

打根を右構えに持ち敵の打ち出す太刀を払ひ附け入るなり

二　受流

打根を下げ打ち込む太刀を受け流して附け入るなり

三　打込

手近なる敵故打根を右の肩に担ぎ打ち附くるなり

槍　長刀合三箇条

四　飛乱

突出す槍長刀を飛び越えて敵の体を突くなり

五　留手

打根を青眼に構え突出す槍長刀を払ひ附くるなり

六　水月

打根を左手に持ち突き出し薙ぎ払ふ長刀を受け流しつゝ附け入るなり

弓附（弦切、矢尽）五箇条

七　打落

打根を右手に持ち槍刀を突き出し斬り附くるを打ち払ひ落し附くるなり

八　突上

打根を右手に持ち青眼に構え附け込みて敵の脇腹を突くなり

九　受留

切り込み附け込む頭を打根にて払ひ又は留めて附け入るなり

十　払留

太刀槍其外とも敵の得物を打ち留め払ふことなり

十一　柳露

突き出す槍を飛び越えて打根を投げ附くるなり

暗夜四箇条

十二　透目附

能く透し見て静かに歩み寄り敵のすきを突くなり

十三　静心

打根を左手に持ち下して能く心を沈め之れも静かに進みて敵の容子を見て附け入るなり

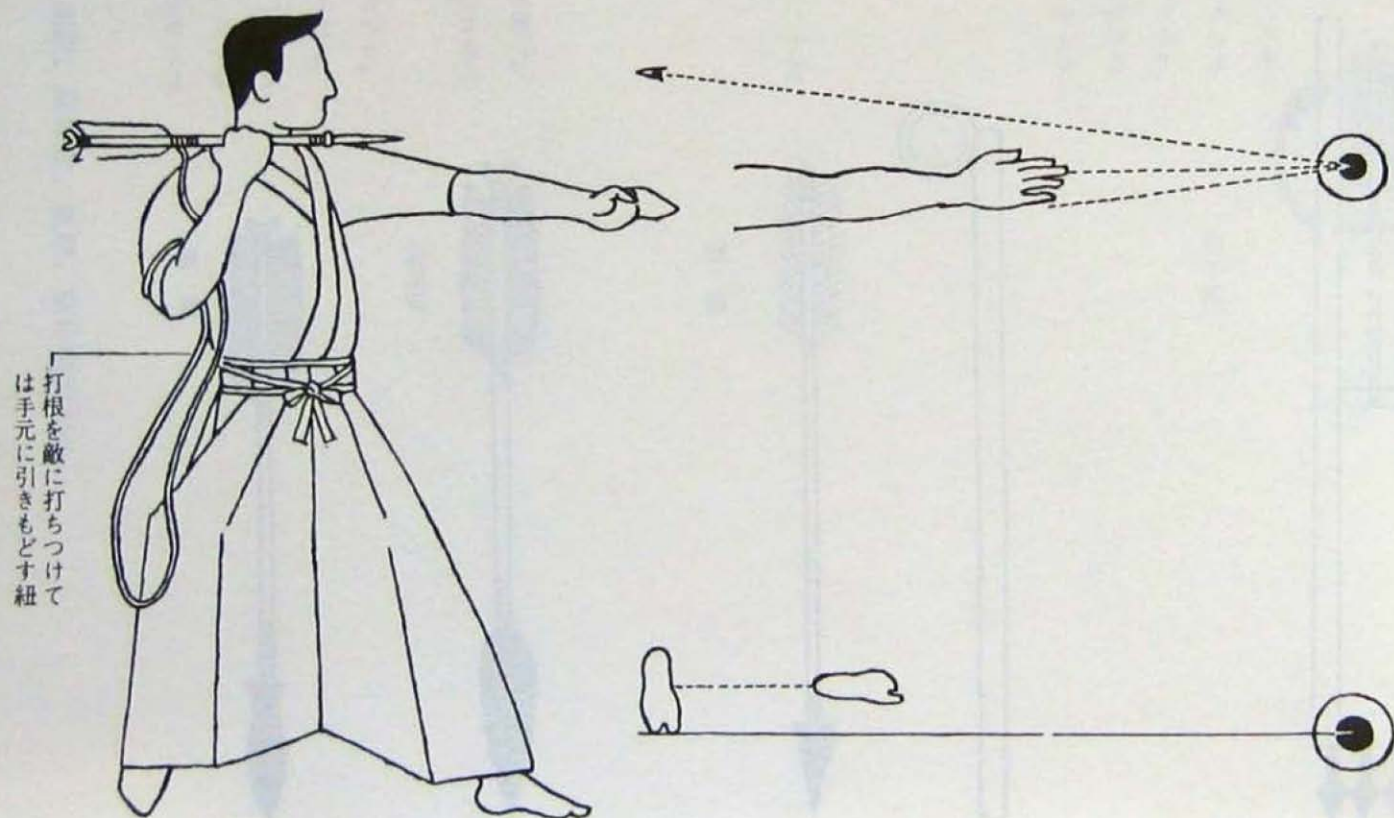
十四　探突

文字の如く左右遠近をうかゞひ附け入りて敵の油断を見て刺すなり

十五　捨見

右手に打根を下げて敵の居所を見定め早足に進みて突くなり

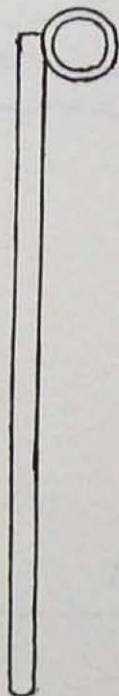
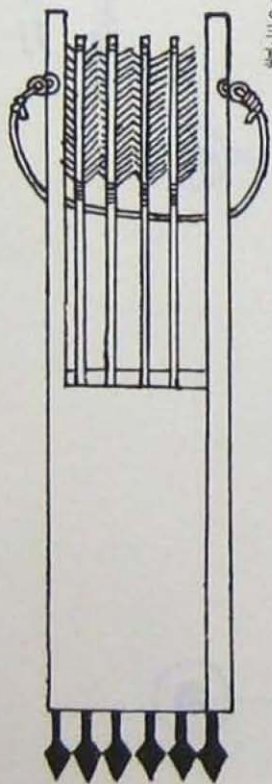
打根の打ち方

要領は、投槍と同じ。

支那袖箭その他

支那には、袖箭、流星箭、鞭箭、筒子箭がある。

袖箭は、短かく袖にかくしていて手で投げる。三十歩くらいの敵を倒すことができる。わが国ではこれを、打根または手突矢という。

流星箭も同法は同じであるが、袖箭よりも先が重い。

鞭箭は、銅を溜子にして放す。

筒子箭は、竹の筒の中え長さ一尺二寸くらいの短箭を入れて、手で発するもので、箭には毒薬のついたものもある。わが国の吹矢と手裏剣を合わせたもの。

袖箭

流星箭

鞭箭

筒子箭

手裏剣術

手裏剣術とは

手裏剣術のはじめは、人皇第十二代景行天皇（六四八 七九〇）の皇子日本武尊（七四二 七七三）が御東征の帰途、足柄（今の神奈川県—古事記）坂下において（日本書紀には信濃の国となっている）糧食をとられておられたとき、その坂の神が、白い鹿になって来かかった。そのとき尊は、食べ残しの蒜をもって、その白鹿の目に打ち当て、打ち殺されたという古事記、日本書紀の事跡をもって始めとされる。

手裏剣術とは、遠く離れたところから、手の裡（裏）の剣（陰剣）を敵に、投げ、撃ち、離して倒し、勝理（利）を修むるわざ（術）という意義で名づけられたもので、したがって名称も、手裡剣術・手裏剣術・手離剣術・投剣術・打剣術・撃剣術・修理剣・修利剣術とも書かれているわけである。

支那では、銑鋧・鏢・三不過術といっている。

この手裏剣術は、昔まだ飛道具の発達しなかった頃は、武士は飛道具にかわ

日本武尊

るものの一つとして、他の武術と共に学んだものである。

この手裏剣術は、護身と攻撃を兼ねた術で、大別すると二法となる。

その一を留手裏剣、他を責手裏剣という。

留手裏剣には、

忍手裏剣・静定剣・乱定剣

の三伝があり

責手裏剣には

火勢剣・薬剣・毒剣

の三伝がある。

忍手裏剣というのは、手裏剣術用として特に用意された(特定の)手裏剣をもって、敵を撃つ方法で、通常いわゆる手裏剣術とは、これをいうのである。

その武器として用いる手裏剣の形態は種々あり、一様でない。流派々々によっても、一種独特の手裏剣形態がある。

針形・棒状・角形・釘形・平形・短刀形・槍の穂形等のほか、投げつければどこか一角か二角は必らず突き刺さるように造った三光・四方・星状(五方)・六方・八方・十方・十字・車剣・万字形等がある。これらは、総称してすべて車剣という法輪より出たものである。

手裏剣打法(棒状の)には、直打法と廻転法の二種があり、剣先を指先の方にして打つのを直打法、剣先を掌の中にして打つのを廻転法という。

打ち方には、正常打・横打・逆打の三法がある。投撃を加える個処は、眉間・両眼・人中・咽喉・心臓部・乳部・水落・脇腹・臍部としている。

静定剣とは、特定の手裏剣を用いず、とっさの場合に、持ちあわす小刀・小柄・笄等をもって手裏剣代用として撃つ方法である。よく「小柄を抜いて手裏剣として撃つ」等といわれるのは、この静定剣のことである。したがって武士は心得としても、常に手裏剣術を練磨したものである。

乱定剣とは、急場にのぞみ、有合う器物、たとえば、火入れ・灰吹き・盆・茶碗・鉄瓶等何んでもそこに有合う品を敵に投げ付けて、急場の危地を脱する方法である。

責手裏剣に属する火勢剣とは、火矢・松明・ほうろく火等をもって、敵を責める方法で、今日の擲弾筒(手榴弾)を投げる等は、この火勢剣である。

薬剣(不殺必倒の剣ともいう)は、目潰し(遠当術)・霞扇の術・または息討器による方法等である。この方法は、敵を殺さず、仮死せしむるにある。多くは大事な敵を捕縛するとき等に用いた方法で、器具・薬法等十数通りある。

毒剣(必殺不生の剣ともいう)は、どうしても倒さねばならぬ敵に用いる方法で、多くは手に負えぬような剛敵を倒すのに用いた方法である。瞬時に即死せしむるのと、数時間後に死に至らしむるのとによって、その器具・薬法にそれぞれの秘伝がある。

手裏剣術流派名録

あ

浅山一伝流　慶長　浅山一伝斎重晨

○天津流　江戸初期　天津小源太

荒木流　天正　荒木夢仁斎源秀綱

い

伊賀流　永禄

○伊豆流　明和安永頃　上遠野伊豆広秀

一貫流　渋木新十郎

一方流　寛永　難波一方斎藤原久長

え

円明流　慶長　宮本武蔵政名

お

温古知新流　川澄平九郎政光

か

春日流

○上遠野流　明和安永頃　上遠野伊豆広秀

香取神刀流　飯篠長威斎家直

願立流　寛永 願流トモ云ウ　松林左馬助永吉

く

日下流　日下一甫

こ

甲賀流　永禄

狐伝流　藤原鎌足

小堀流　小堀勘解由入道瀾清平好之

し

止心流　真杉三郎左衛門三設

実用流　文化　平山行蔵潜

自得流　岩佐弥五左衛門清純

諸賞流　安永　土川仁和右衛門至親

正雪流　由井民部助橘正雪

白井流　白井亨義謙

真陰流　天正　疋田豊五郎景兼

○心月流　享保　藤原成忠

新心流　寛永　関口八郎右衛門氏心

神道精武流　文化　小笠原城之助長政

せ

清心流　慶長　森霞之助勝重

関口流　寛永　関口八郎右衛門氏心

た

大東流　武田惣角

竹内一心流　篠原重右衛門一心斎藤原慶英

○竹村流　竹村与右衛門玄利

立身流　立身三京

ち

知新流　正保　飯島市兵衛

つ

○津川流

て

天流　吸江十右衛門

天真伝一刀流　白井流ナリ　白井亨

に

○丹羽流　宝暦頃　丹羽織江氏張

ね

○根岸流　根岸忠蔵宣教松齢

根来流

ほ

宝山流　元亀　堤山城守宝山

へ

平集流

ま

末流　中野伴水景達

松葉流

み

三浦流　三浦揚心

む

武蔵流 慶長　宮本武蔵政名

武極応的流

も

○本淵流　小紫惣兵衛

○毛利流　毛利源太郎玄達

や

柳生流 慶長　柳生但馬守宗厳

山内流　山内須藤刑部秀久武休斎

ゆ

融和流　伊藤伴右衛門高豊

よ

楊心流 慶長　秋山四郎左衛門義時

○義尾流

○印は手裏剣術を主とした流名

手裏剣術伝書

心月流手裏剣術目録

一、手裏剣軽重之事

一、手裏剣持様之事

一、手裏剣手之内之事

一、足踏之事

一、打出目付之事

一、指屈伸之事

一、手裏剣離之事

右六箇条立打也

一、居打之事

一、左右打之事

一、前後打之事

一、歩行打之事

一、脇差懐剣打之事

一、闇夜之打様心得之事

一、手裏剣打様秘伝

右二箇条有り

右之条々令相伝畢　猶於鍛錬修行有之者免許之口伝打方可令相伝者也仍目録之
趣旨如件

藤原成忠

藤原議時

知新流手裏剣目録

一　手裏剣離之事
一　手裏剣軽重之事
一　同長短之事
一　同手之内之事
一　同足踏之事
一　打出目付之事
一　指屈伸之事
一　上下打之事
右八ヶ条立打也
一　居打之事
一　左右打之事
一　二本打之事
一　三本打之事
一　四本打之事
一　三間打之事
一　手裏剣留打様
一　風切
右八ヶ条也
一　夜打様
一　懐剣
一　腰刀
右三ヶ条者免許之伝也

右之条々令相伝畢猶於鍛錬修行有之者免許之伝口打可令相伝者也仍目録之旨趣
如件

大和郡山之住士
　飯嶋市兵衛
同
　飯嶋源太左衛門
同
　日置金左衛門
尾州之浪士
　浅野伝右衛門
同国之住士
　丹羽織江

知新流手裏剣免許

当流手裏剣者知新流剣術之内抜出シ一流トス独心不浅多年出精稽古之仮神妙之至ニ候依之夜之打形並懐剣腰刀打形不残令伝授候猶此上無怠慢工夫鍛錬可為専一候向後独心之輩於有之者戯事ニ心得不申様以固可有之指南候仍而免許如件

大和郡山之住士
飯嶋市兵衛

同
飯嶋源太左衛門

同
日置金左衛門

尾州之浪士
浅野伝右衛門

同国之住士
丹羽織江

印可伝授書

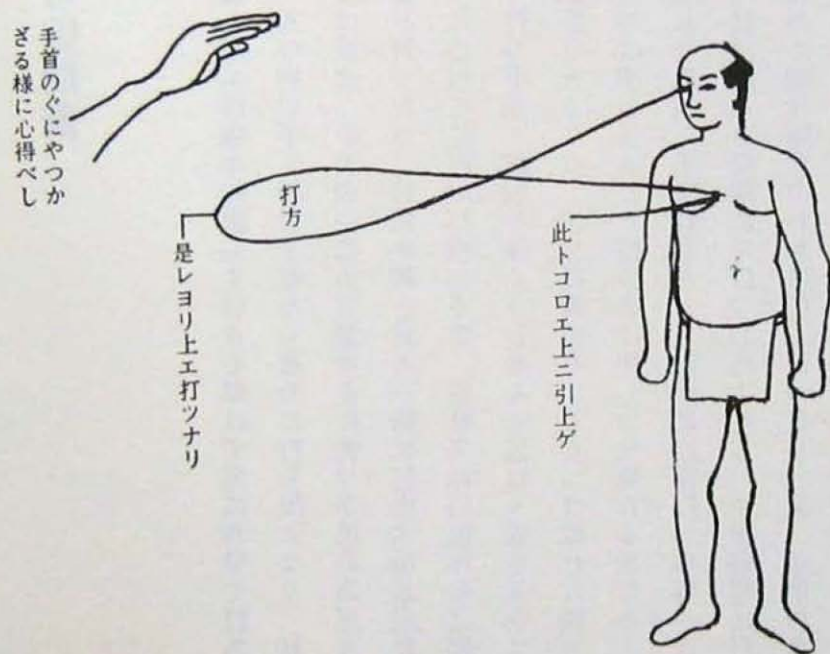
知新流手裏劔と云ふは強きに限らす弱きを厭はず兎に角早く打ち出し當るを専一とする也　先の柄に手を掛ると見たら直ちに打ち出すなり　目録の内に打出し目付と有るは是也　手裏劔を初めて教ゆるに先つ手前の右足を先の目當て先きえ向けて踏み打つなり　打出す劔と足と一所に打出す事也足踏み専一也
足踏みそまつに心得ては夜の打様に不當　桃燈又は行燈杯有之場所にて打つ時は光をおゝて打つ事也　扨劔を強くきかせんと思はゞ劔を柔かに持つて振り打ちに打たは劔當りきくなり　扨又打劔の右より立つは離れに指先のきく故也
劔の左より立つは手のひらにて打つ故に押しつけ離れる故なり　劔の上より立つは離れをおしむ故也　手離れをおしまぬ様に心得打つ事専一なり
笠かむり打つには間近き場所にて打つ心得よろし　手裏劔留に打ち通すもよろし　水にぬれたる劔は随分やわかに持ち打つなり　又　幼年の者に大劔を打たするには肩えかけて打たする事　長き物を打つには中程のつり合を考え打つ事なり
目録の内に四本打といふ有り　四本の劔を紙にて状を封ずる様に巻き劔はうち違いに包み其儘打ては二本の劔はたしかに立つ事なり　又はひとえの袋に入れて打つ事なり　袱紗などに包み結ぶは悪るし　結び目のあらば打ちがたし　能く〳〵心得べし
劔がしらの下り立つは押付のきく故也　横平に當るは大指のすべる故也　又りきみの有る故もあり　是れは能く見合せ直す事なり
懐劔手の内は両様におしえてよろし引上げの手の下らぬ様におしえる事也
懐劔長さは六寸より九寸五分迄　扨小剣にて板金を通すは劔のきく事を見るにあらず手離れすなをに離るゝ事を見る為なり　劔のひずみて立つものは心能くぬけざる事なり　懐劔のさやを下え抜き打つ事なり
扨　手裏劔修行の人の心得と申すは常々客に参り候はゞ　先づ茶を出し候はゞ茶碗を右の膝元に置く事　煙草盆を出し候はゞ随分と手近かに引付け置く事な

り　手裏劔に限らず扇子にても右の心得よろし

飛龍劔　腰刀は抜き陸し下えさげむねを平手にて持ちそえ　つる〳〵と足をはこび間合を見て打ち離す事也　打ちかゝるに振り上げ打ち出す節しばらく刀を引き出して離すことなり　打ちかゝる離れの節柄を下え引き下げ離すことなり

腰刀長さ一尺二三寸より七八寸よろし　長き腰刀は不好　目當は土俵にて打たする事なれ共　近年は目當板にて打たする事になりたり　然し飛び返えり候えばあやまち有る事故用心すべし

扨　門人にて無之人手裏劔所望之者有之候はゞ　初め五本随分やわらかに打ちて見せる事なり　次に五本は常々稽古之通りに打ち見せ　三度目に板金を打つ心にて打つ事也　三度之外打つ事なかれ　他人に打ち見せるには居打立打二本打つ事　懐劔は二三本打ち見せる也　何れも沢山に打つ事なかれ　小劔は四品の外かたく打つべからず

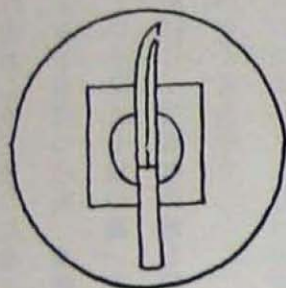
扨　劔を拵うるには　小劔は重さ二十五匁より三十五匁迄　長さ五寸より四五分迄二三分通用なり夫れも人々物好み次第なり

足先を向の足先えむけて引上る手と一所に足を踏込み打つ也　打ちかくる手と一所に踏込む事也

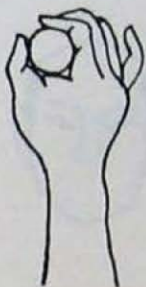
初め人に教ゆるに　五六尺の間合にて随分やわらかに打ちおしゆる事なり　追々劔の立つに付いて　足首丈つゝ　しさり　次第〳〵にしされば本間えなる事なり

此の通り指の直なる様に

稽古の節劔を取り落す事有り　直ちに拾ろいて打つ事悪し　落した劔にかまわず手に有る劔を打ち切りしあとにて拾い打つ事なり　劔を手の内え能くなつける様に指をつたい様に打つ事専一なり

劔を打つに我が手のひらの先え見ゆる様に心得打つ也　打ち出す時劔より足の先え出る事悪るし　劔と足と一所に踏込む事なり

大指の離れぬ様に心得打つ事也　大指すべれば劔横ひらに當るなり　又劔の離れをおしめばたてに立つなり　懐劔初めて教ゆるに手の内は定法なり　目付は鼻より下を心がけ打つなり

此の通りに当る様に不立様に打たせる事也ケ様教えれば則ち立なり是れ秘伝なり

懐劔と腰刀は離れのおしみて放つ心也
懐劔之目付は鼻より下を打つ心也　懐劔は胸より下らぬ様に打つなり
劔に十分一之劔というは八十目の劔一本に八匁の劔二本是れを八匁劔を打つ
次に八十目の劔を打ち　又八匁の劔を打つケ様に入違いに打たすれは大劔にて
も小劔にても打ち覚える為なり
丸き物を打つには指三本かけて打つ也左之通り

居打は打出す節いしきを少し上げて度々に打つ事也
手裏劔留は先の左より返しこみ打っ事也　常々稽古に足踏み第一也　初めに教
ゆる節足は目當の通りえ右足を踏み振り上げ打ちかゝる時足を一所に踏み出す
足の踏み出す事劔より早く出るは悪し
上下左右之乱劔の者えは目當を見はる事悪し　劔取る節手本を見て振り上げる
と一諸に目當てを見て打つか　又は手前の足先を見て振上げる迄目當を見る事
悪し
常々足踏みは左の通りなり

右の通り足踏みは左足の大指の頭通りえ　右足のきびすを踏出す時右足を二ツ
丈踏み出す也　又右足を踏み付けて打つもよろし　左足はきびすを踏付けぬ様
に心得専一也　万事足は軽く踏む事なり
遠間はさかに劔を取り打ち出す時指先にて少し押える様にあしらいて離す事な

り

稽古五本劔を左の腰通りえ下げ　一本づゝ取り打つ事也　腰通りと云うは劔打懸り直ちに刀の柄に手のかかり申す為めに持ち覚ゆるためなり　五本剣は劔と心得ず　一本打出し直ちに柄に手をかけ申す心なり　刀の鯉口を持つ心なり

当り左右え乱劔を直す事　巾二三分長さ目当板の丈に白紙をたち板えたて張り打すれば左右はづれ直る事なり

甘シヤウ剣と云う有り　是は一子相伝同様の事なれば印可つかはし候とも此カンシヤウ剣は伝授無用也

目当四寸に五寸と定むる事は元祖飯嶋氏竹村与右衛え打見せ候節　目当は何程に致し稽古致し候やと尋ね候時四五寸の目当と申すに付き四寸に五寸と定むるなり

此印可之一巻者手裏剣伝授之滀奥也然処貴殿之執心他勝殊修行不怠故授与之早
後門人に伝えむとあらば必ず其人の器量を計りて可伝妄りに不可伝仍而奥書
如件

大和郡山之住士
流祖　飯嶋市兵衛

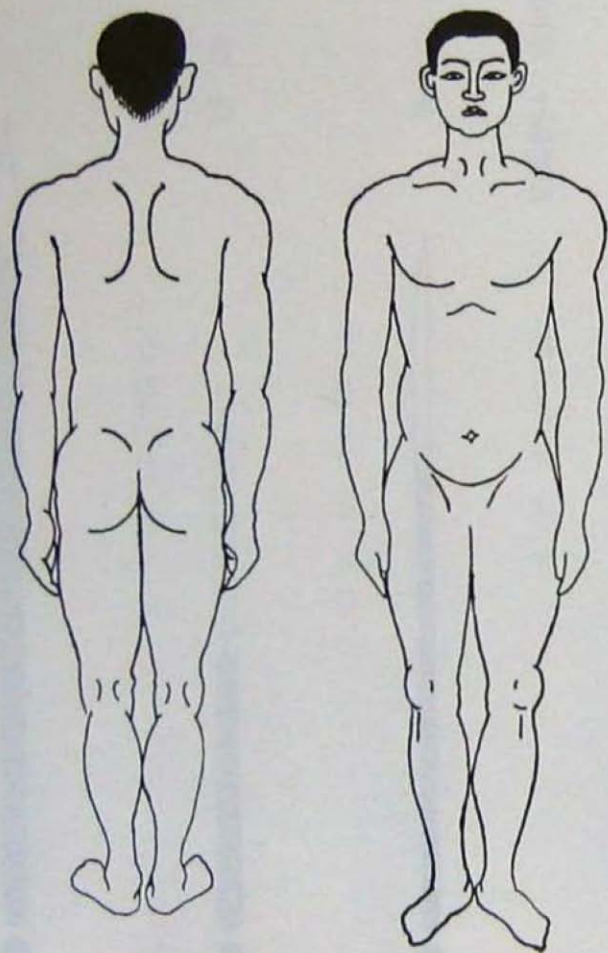
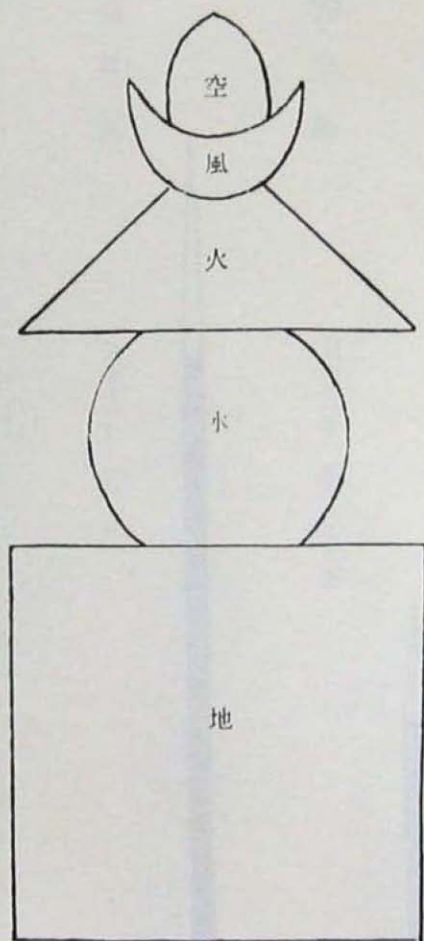
同　飯嶋源太左衛門

同　日置金左衛門

尾州之浪士
浅野伝右衛門

同国之住士
丹羽織江

各流手裏剣の形態(一)

手裏剣の長さは、流派により、人によって一定した寸法はないが、五寸または三寸を基本定寸としたものである。五寸は、五行を表わし、空風火水地の人体に討ち込むという意を現わしたもので、また、三寸は、日月星の三光、すなわち、朝の明星と空の日月の二光を以て、不絶剣という意である。

次に各流派特定の手裏剣の型態を示す。

各流手裏剣の形態（一）

心月流
長サ七寸　径二分二厘
伊豆流
長サ四寸七分　径一分七厘
伊豆流
長サ五寸八分　径一分五厘
願立流　上遠野流
長サ六寸八分　径二分
白井流
長サ七寸　径二分
根岸流
長サ三寸　径一分五厘
根岸流
長サ四寸五分　径五分

狐伝流　諸賞流

長サ四寸八分　径二分五厘

長サ六寸　径三分

長サ四寸五分　径三分

長サ四寸六分　元径三分五厘

長サ三寸　ないし　三寸五分

孟淵流

長サ五寸五分　三分角

長サ四寸四分五厘　元一分五厘角

香取神刀流

長サ五寸九分

長サ五寸二分　径二分

知新流

丹羽流

長サ五寸二分五厘　三分五厘

長サ四寸八分　幅三分三厘　厚ミ一分六厘

津川流

長サ六寸三分　幅五分三厘　厚サ一分

伊賀流

伊賀流

甲賀流

長サ七寸　元幅七分

諸賞流

長サ七寸　元幅七分五厘

竹村流

長サ八寸　元幅八分五厘　棟厚サ五分

堤宝山流

各流手裏剣の形態(一)

菱鉄

長さ二寸、幅一寸二分、厚さ一寸くらいの稜角をもった菱形の鉄塊の中央に穴を穿った物。

　これをいくつでも紐に通して持って行き、敵に投げつける手裏剣の一種。

鹿子玉

（流派により、弾き玉、隠し目消し等の別名あり）

これは鏡新明知流の鹿子玉。丸さ五分、針三分。

　敵の顔面、目、喉等をねらって、投げつけたり、指先で弾きつける。

投箭

前の欧州大戦の時、仏軍では、投箭なるものを多数造って、これを飛行機の上から、独軍の密集部隊の上に投下して非常な効果を収めた。これは日本の十字手裏剣の一つが、巴里の兵器参考館に陳列されてあったのを見た仏国の一技術将校が、それによってヒントを得て、それを模造して試みたのが、はじめであった。

この投箭は、長サ十二センチ、中径八ミリ、重量十五グラムで、一機に三千五百から五千くらいを携行投下したのであるが、発射もせず機関銃掃射と同様の効果を挙げた。

二千メートルの空から投下すれば、地上近くで秒速百五十メートル、千メートルで優に百メートルに達し、その貫通力は、馬上の人の肩から突入、臀部え抜け、さらに馬の胴を貫通したという。この投箭は後、英軍によって形を変えて用いられ、次いで独軍でも長サ十三センチとし基部をもじって矢が自転しながら投下するよう工夫され、逆に英仏軍を苦しめたが、休戦近かったのでその使用をまもなくやめた。第二欧州戦でも独軍はただちにこれを使用した。

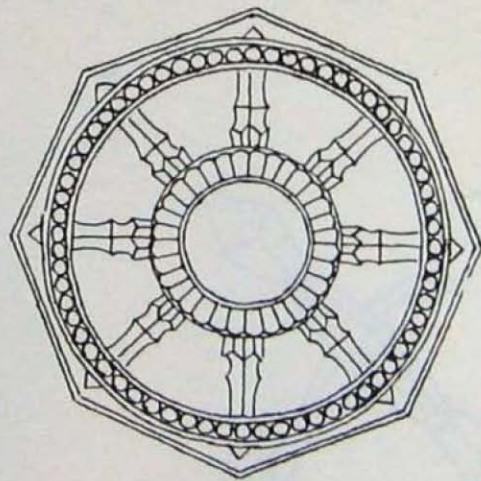
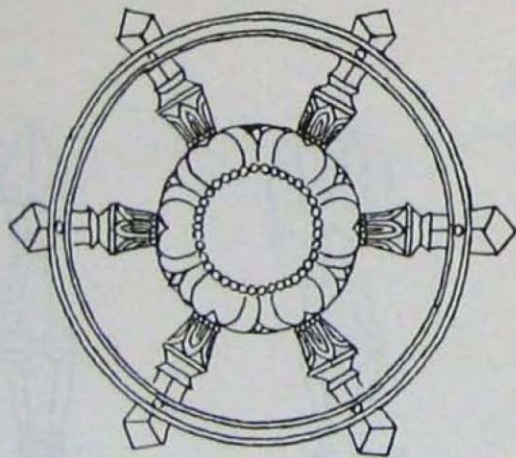
仏

英

独

各流手裏剣の形態(二)

法輪の図

法輪

法輪

法輪には、五輪宝、六輪宝、八輪宝等がある。その五輪宝、六輪宝、八輪宝が、五方、六方、八方等の手裏剣の造られる因をなしたものである。

法輪や、小堀流の五方、六方、八方等はみなそれである。また、その他の手裏剣も多くはその信仰観念に基づいて製作されたもので、羯摩が十字手裏剣である。

法輪は古代印度の武器の一種で、通常車輪の形をなし、輪辺には鋭い剣刄をつけている。

これは投げつけて敵を倒すに用いたもので、この法輪はもと転輪聖王が仏法守護のために持した武器で、法輪は旋転運動をして大地の凸凹を平均し一切の障碍を破砕する功徳を有するものとしている。

これにならって出来たのが車剣である。

十字の十は、悪魔攘除と攘災招福の呪符に用いられる。

☆ 五方、星状は、五行（木火土金水）、五大（空風火水地）、五体を象どり、悪魔退散の呪符。

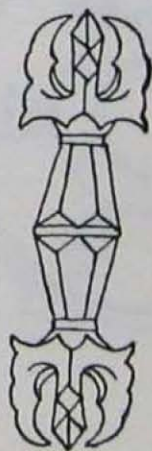
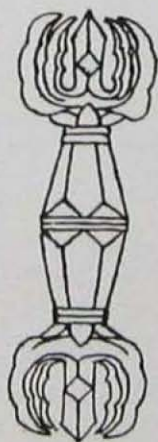
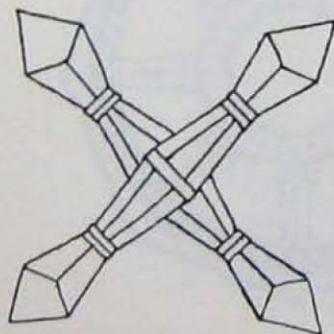
☆ 籠目は、災厄攘除の呪符で、また願望成就の護符である。

万字は、万徳の集まる吉祥の相象である。この万字には、左旋する左万字卍と、右旋する右万字卍とがある。左万字は陽・日・太陽を表章し、右万字は陰・月を表章したものとしている。

独鈷

三鈷

五鈷

羯摩

三鈷、五鈷は、これを投げるというより、手に握り持って、敵を撃ち突きする、仏法守護のための武器の一種で、撃突武術用の陰拳、三䒢、他力、五輪砕、微塵等々の武器と同様のものである。

陰拳
荒木流　本覚克己流

三䒢
為我流

他力
本覚克己流

五輪砕
伊賀流

三光手裏剣

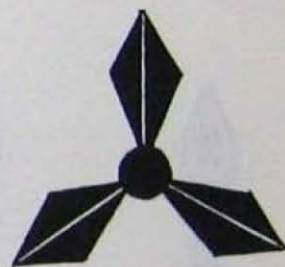
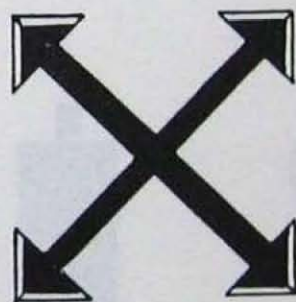
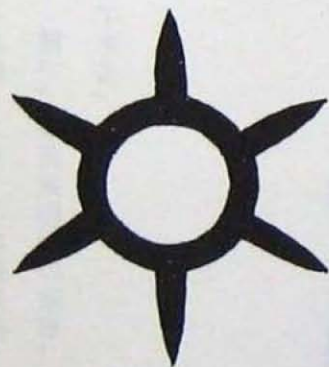
長サ中央円四分
一角剣長サ一寸二分

四方手裏剣

長サ三寸四分

五方手裏剣
一名　星状手裏剣

長サ三寸

小堀流
六方手裏剣

長サ三寸
中央穴一寸

甲賀流　伊賀流
六方手裏剣

長サ三寸

甲賀流　伊賀流
八方手裏剣

長サ三寸

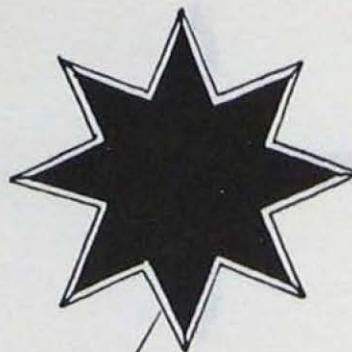
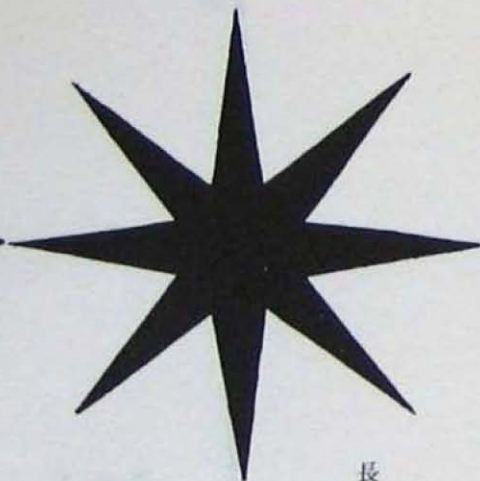
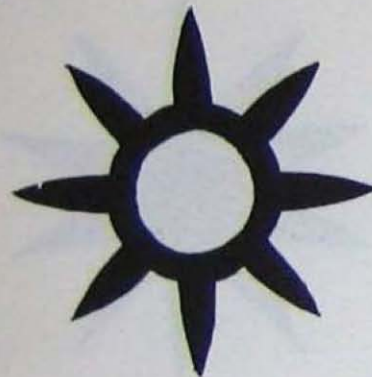
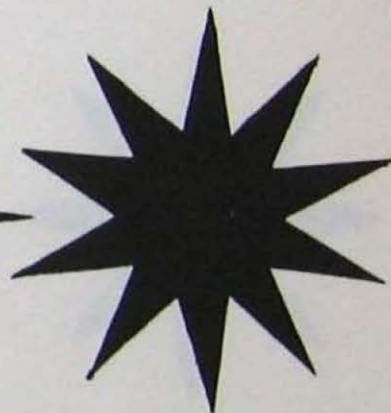
刃

甲賀流　伊賀流
八方手裏剣

長サ四寸

小堀流
八方手裏剣

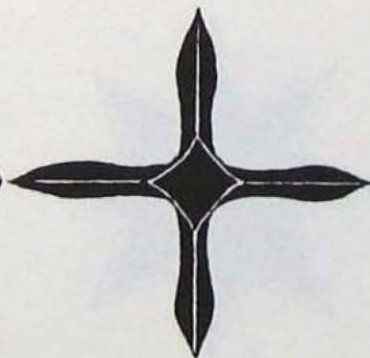
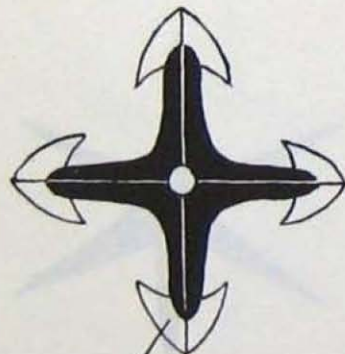
長サ三寸二分
中央穴一寸

各流手裏剣の形態(二)

甲賀流　伊賀流
十方手裏剣

長サ三寸四分

柳生流　甲賀流　伊賀流
十字手裏剣

長サ四寸五分
基部幅四分
基部厚一分

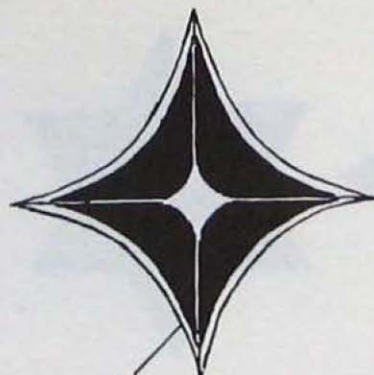
柳生流
十字手裏剣

長サ三寸

十字手裏剣

長サ四寸

伊賀流、甲賀流では四方手裏剣といい、狐伝流、諸賞流では車剣という。

長サ三寸

狐伝流、諸賞流車剣とも糸巻剣ともいう。

長サ三寸

小堀流
万字手裏剣

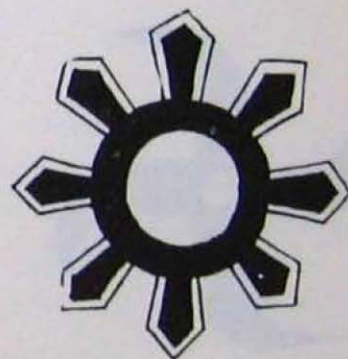
長サ二寸三分

十字手裏剣の変形であるが、正しくは、万字手裏剣という。

長サ三寸二分
厚ミ一分中央穴径二分

爪先刃

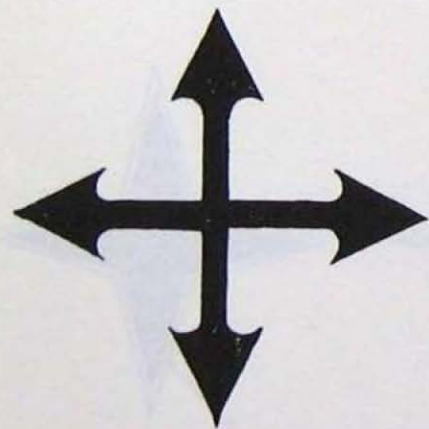
法輪

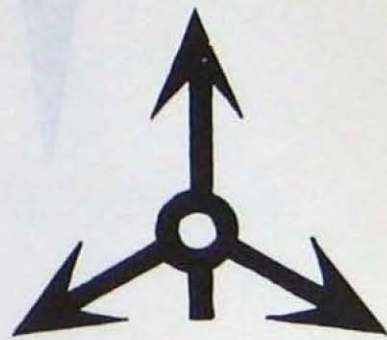
九字

篭目

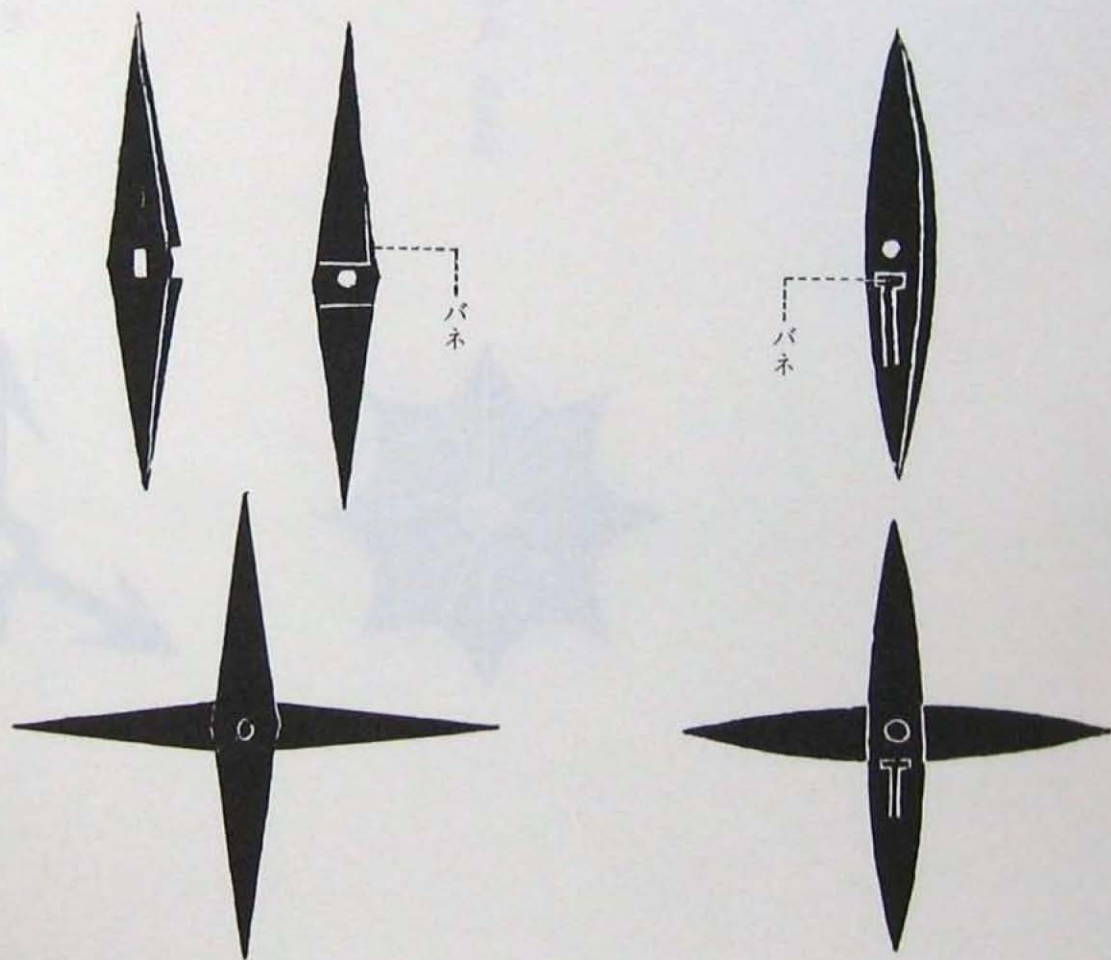
新陰流
龍首剣

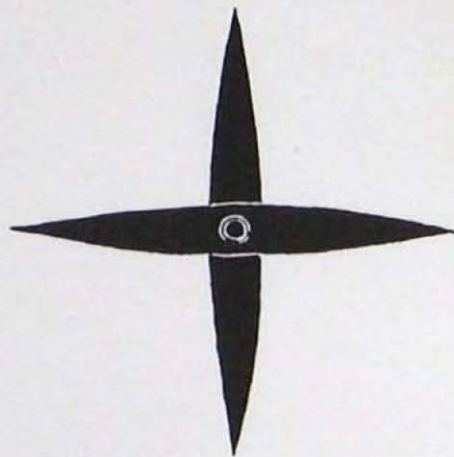
四寸四分

新陰流

三　光

四寸四方

狐伝流　諸賞流

十字形手裏剣

二つの剣を一つに合わせ、開くと十字形手裏剣となるように出来た手裏剣でバネの仕掛があって、たたむと一つになり、開くと十字形となってバネがかかるように出来ている。

竹内一心流

本流ではこれを柳枝剣という。

孟淵流

本流ではこれを宝勝剱という。

手裏剣代用として用いるもの

小柄

笄

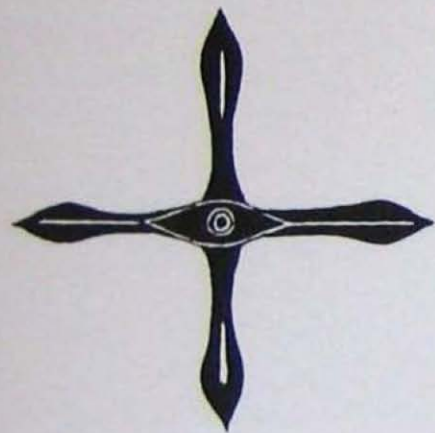
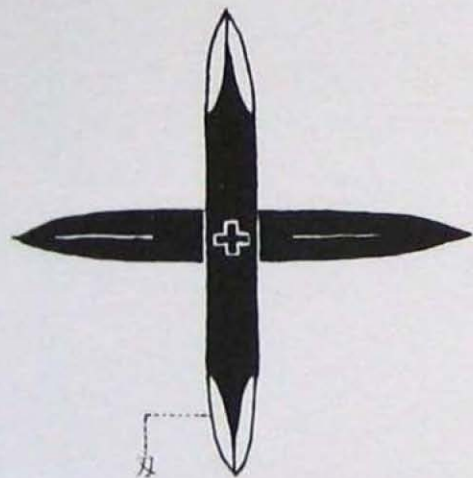
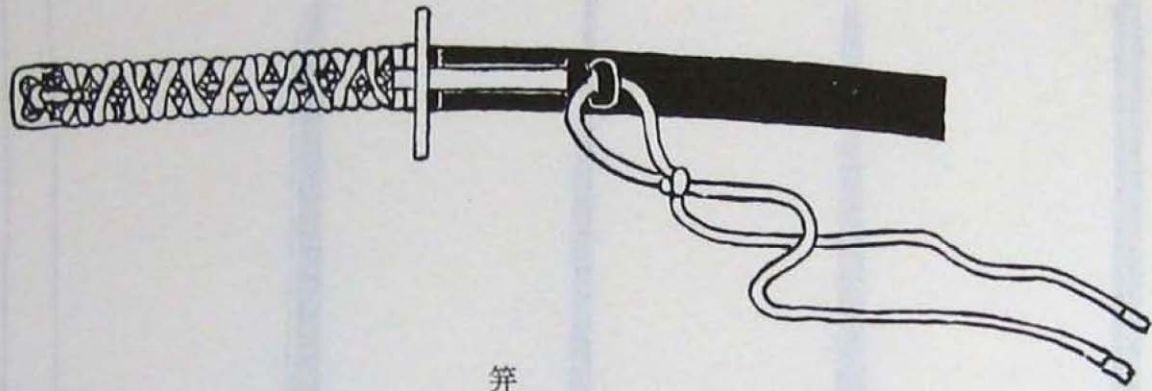
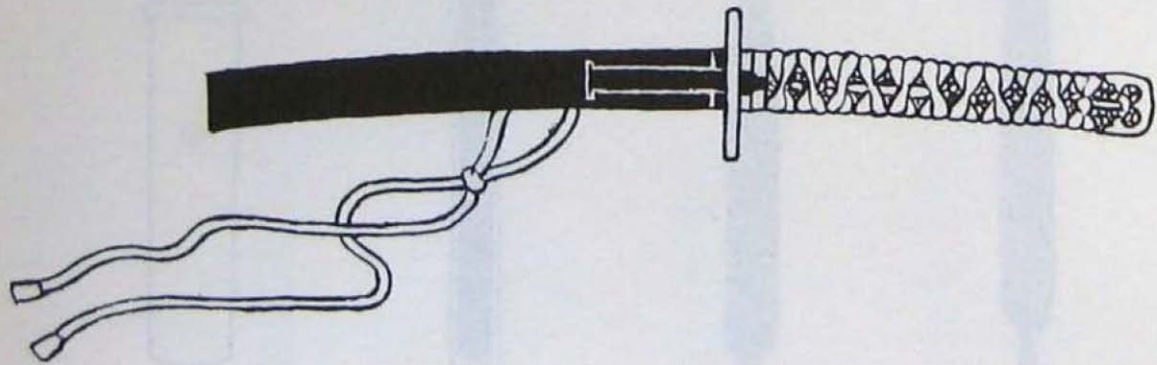
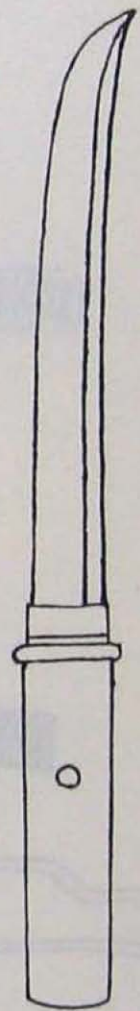
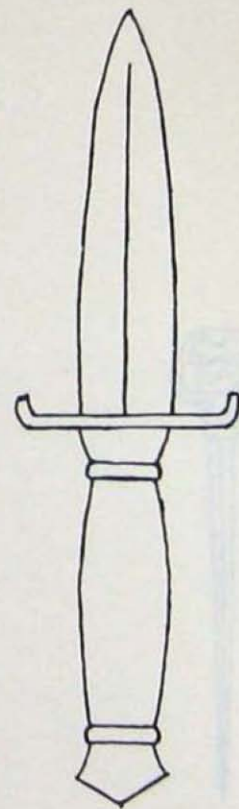
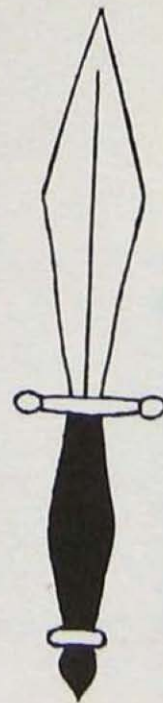
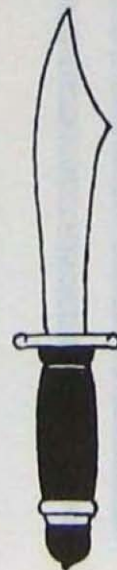
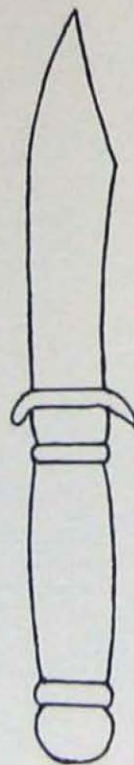
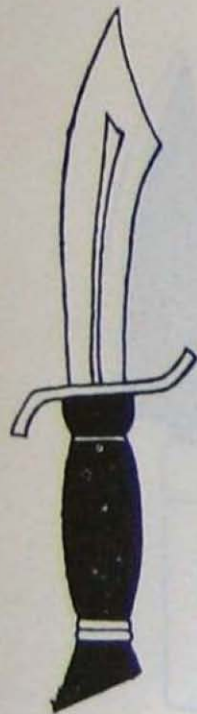
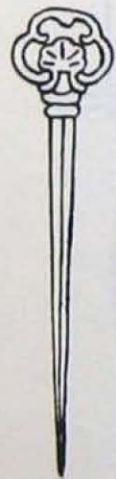
手裏剣代用として用いるもの

手裏剣代用として用いるもの

出刄

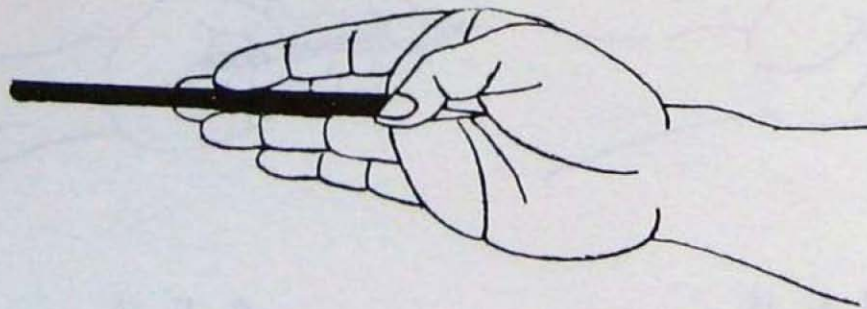
火箸

簪

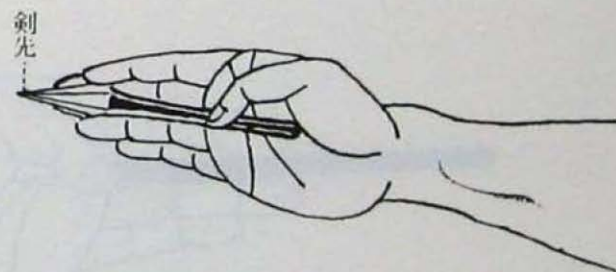
鏢

手裏剣の打ち方要領

手裏剣の持ち方

手裏剣を打つには、手裏剣を、中央中指のところにあてて、人差指と無名指で軽くはさむようにして、拇指で軽く押さえて持つ。

手裏剣を打ち離す瞬間を指して離れという。この離れは、手裏剣を打つうえに重大のものであるから、大いに心得るべきことである。いずれの指にも平均に軽く力を入れ（手裏剣をただ押さえる程度の）、目標に向かって手裏剣を打ち離すとき、指は同時に自然と離れるように打つ。

直打法と廻転法

手裏剣の打ち方には、直打法（陽の劔）による打ち方と、廻転法（陰の劔）による打ち方の二種がある。

直打法（陽の劔）とは剣先を指先の方にして持ち打つ方法をいい、

廻転法（陰の劔）とは剣先を掌中の方にして持ち持つ方法をいう。

直打法

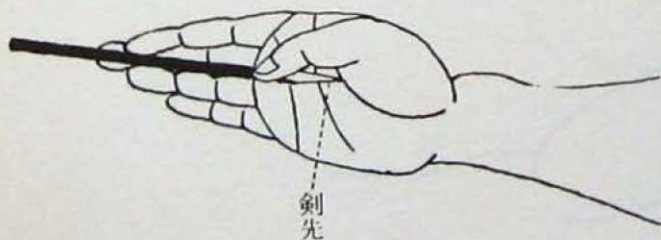
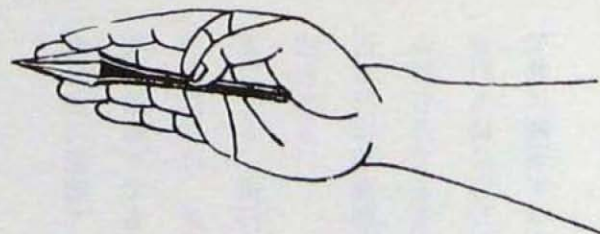
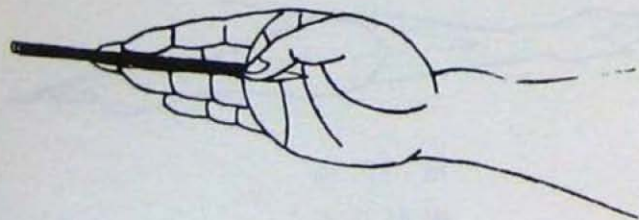
一名陽の劔

廻転法

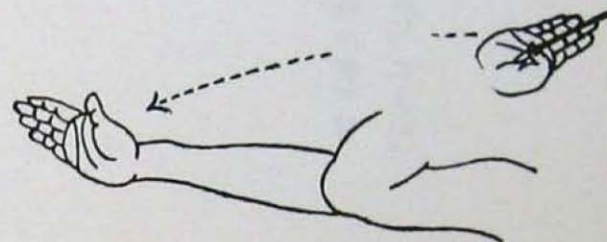
一名陰の劔

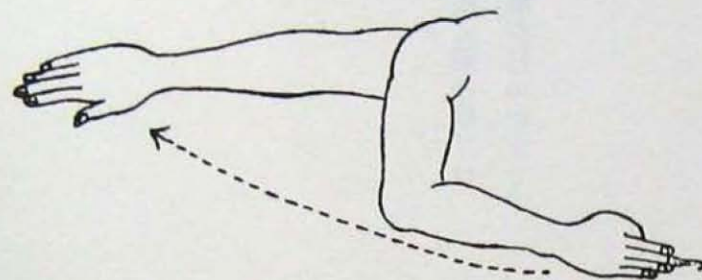
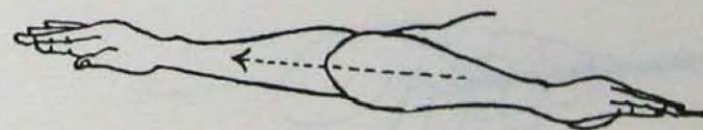
直打法（陽の剱）は
近距離を打つによく、

廻転法（陰の剱）は
遠距離を打つによい。

直打法

廻転法

手裏剣の打ち方

手裏剣の打ち方に三法がある。

正常打ち　一名　本打ち
陰の打ち

逆打ち
陽の打ち

横打ち
中劔打ち
左に打つのを　陽中陰
右に打つのを　陰中陽

直打法（陽劔）でも、廻転法（陰劔）でも、その打ち方動作には、正常打（一名本打）と、横打、逆打の三法がある。

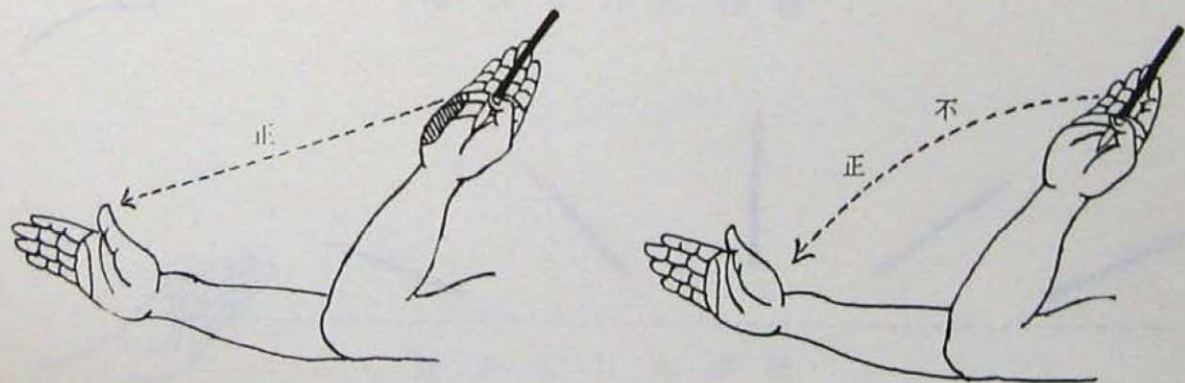
正常打は手裏剣本来の正基の打ち方であるが、横打、逆打も時に応じて打つ方法で共に練習すべき技である。

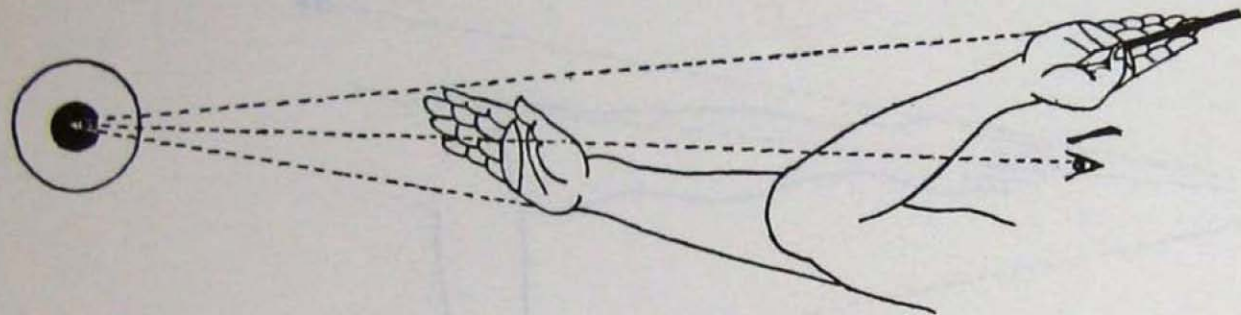
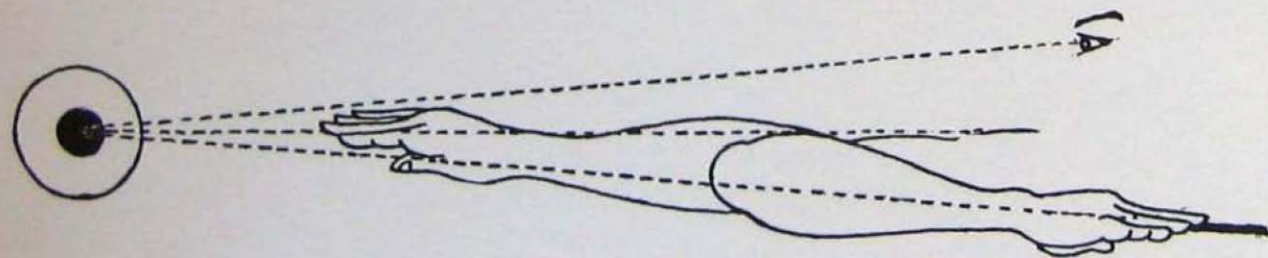
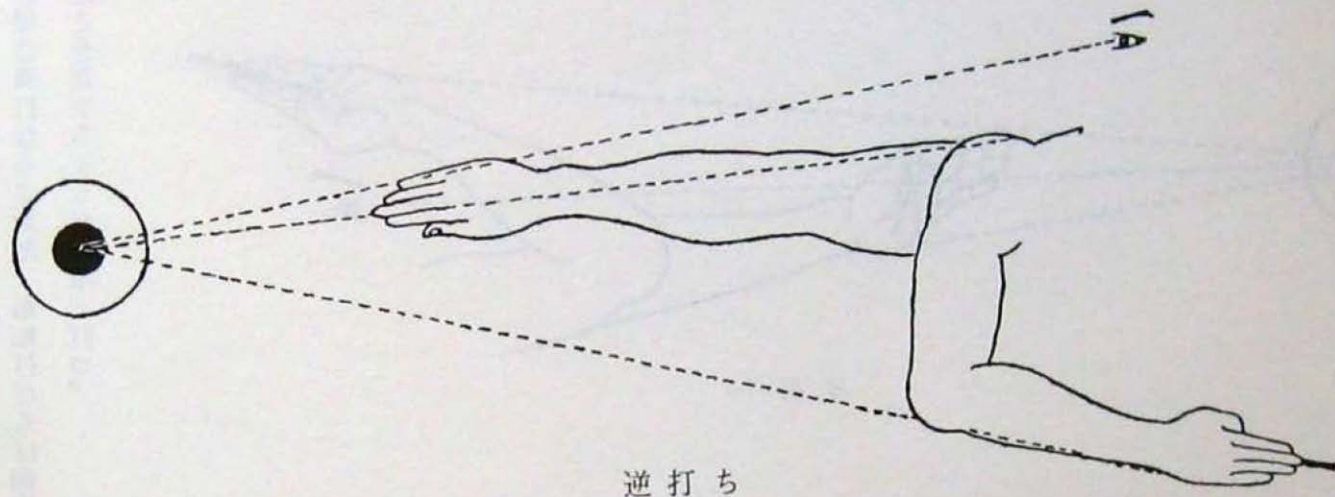
直打と廻転打による剣の飛び方の状態

手裏剣打ち方の正と不正

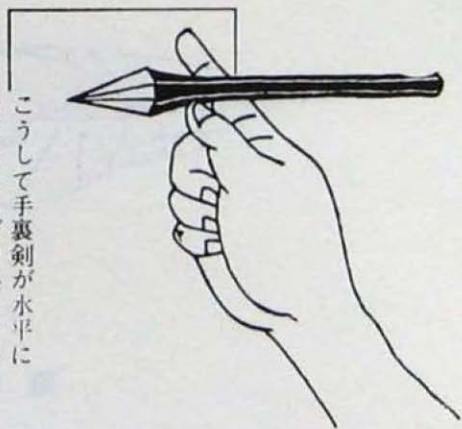
手裏剣は、指や手先だけに力を入れて、投げつけるような打方をしてはいけない。剣がグルグルまわって目標に正しく刺さらない。

腕の力を、手掌の外側、小指丘部のところにあつめ、手刀で斬り下ろすような気持で、突き刺すように打つ。

正

打ち方の要領＝的のねらい方

手裏剣を打つときは、手は目標に向かってまっすぐ延ばすように打つがよい。
この場合真打ならば剣尾、廻転打ならば剣先の当たっている掌の中心と目標の中心と合致するような要領で打つ。

本打ち

横打ち

逆打ち

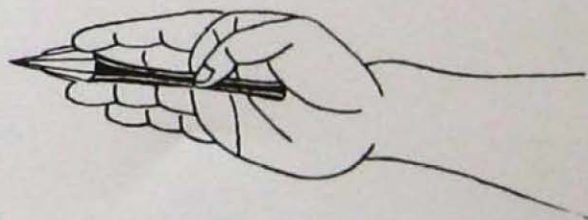
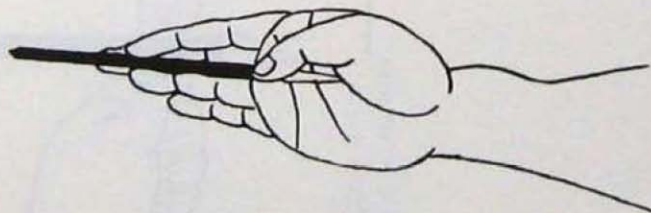
手裏剣の釣合を知る方法

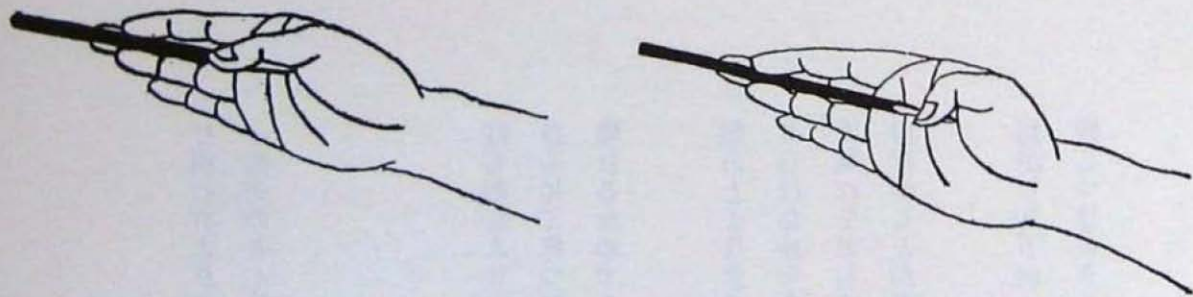
手裏剣の釣合を知ることは、手裏剣を打つうえに重大の結果をもたらすものであるから、図のような方法でよく釣合を調べ、その手裏剣がいずれにも傾むかず、水平になるところが、その手裏剣の中央に当たることを知っておく必要がある。

こうして手裏剣が水平になるところが中央になる

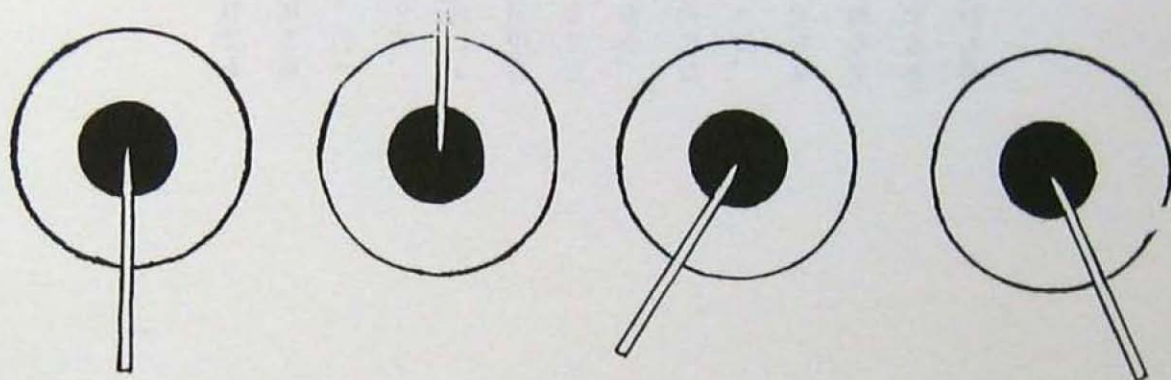
遠近による手裏剣の持ち方

手裏剣を打つ場合、標的の遠近によって、手裏剣の持ち方をかえねばならない。

遠くに打つ場合は、直打ならば、剣先をなるべく中に引いて打ち、廻転法ならば、剣尾をなるべく先に出して打つことが要領である。また、

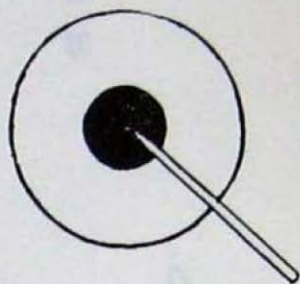
近くに打つ場合は、その反対に、直打ならば、剣先を出し、廻転法ならば、剣尾を引き込めて打つ。

直打法

廻転法

遠近いずれでも剣先、剣尾を延ばしたり、引っ込めたりせず、拇指の屈伸によって、遠近度合を調節することが秘伝である。剣が手の内になじまぬときは、拇指の先でちょっと一ひねりするようにするとよくなじむものである。

打ち方により的への当たり方が異なる

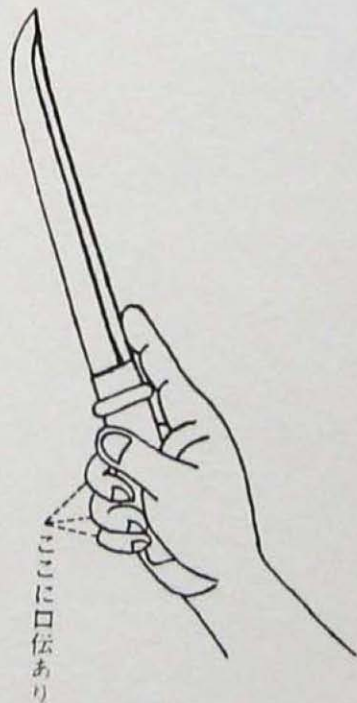
打剣を強くきかせようと思ったら、剣をゆるやかに持って、振り打ちに打つ心得で打てば、当り強くきくものである。

打剣の右より立つは、離れに指先のきく故である。

打ち剣左より立つは、手のひらにて打つ故で押しつけ離れるためである。

剣の上より立つは、離れをおしむためである。手離れをおしまぬように心得打つことが専一である。

剣がしら下がって立つのは、押しつけのきく故である。

打剣の横平に当たるのは、大指の横にすべるためで、りきみがあるためである。

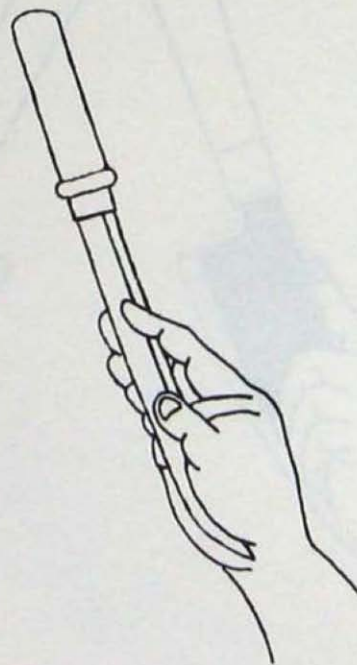
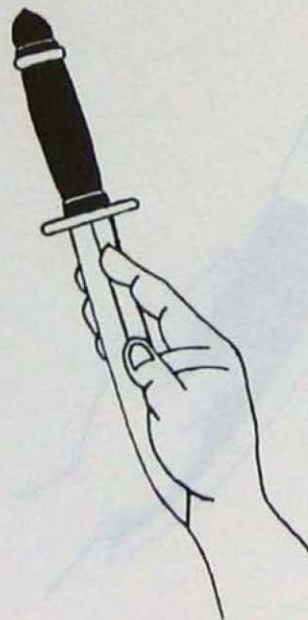
小柄、笄等の類を手裏剣として打つ場合は、廻転打法による打方が多く用いられるが、短剣打ちの場合は、直打法による打方が多く用いられ、廻転打法による打方はあまり用いられない。また、片刃の物は、廻転打法も用いられるが、両刃の物はほとんど廻転打法は用いられず、直打法が用いられる。また、大刀、小刀の撃ち方は、投げ鎗、打根の撃ち方と同じ要領になるから、別に撃ち方がある。

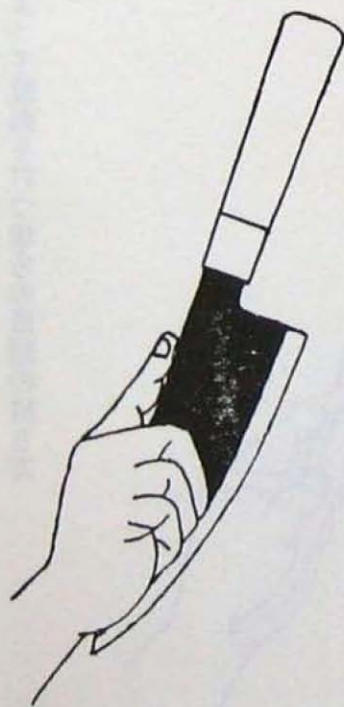
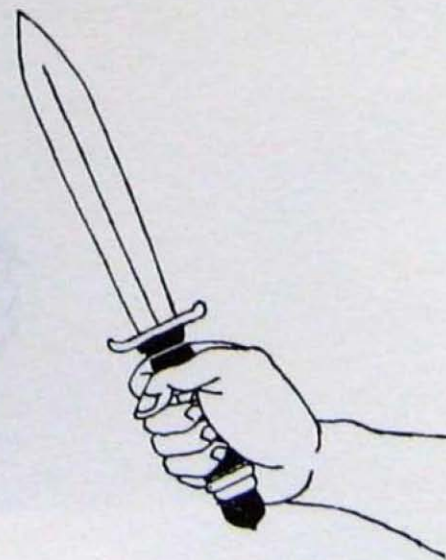
直打法によって短剣を打つ場合の短剣の持ち方

廻転打法によって短剣を打つ場合の短剣の持ち方

短刀

短剱

頭指と中指の間に刀腹をはさみ

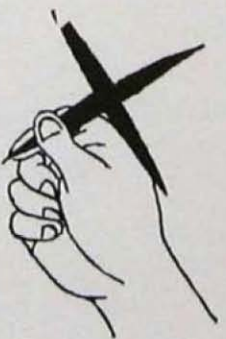
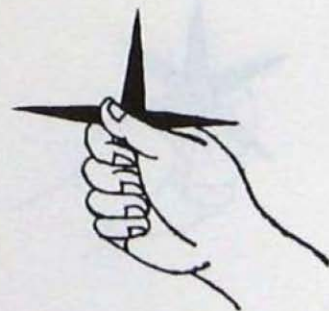
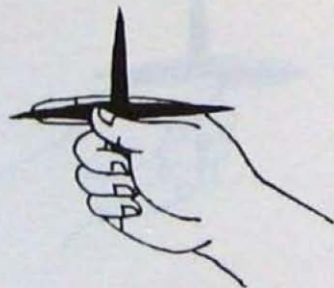
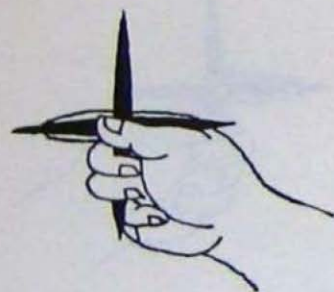
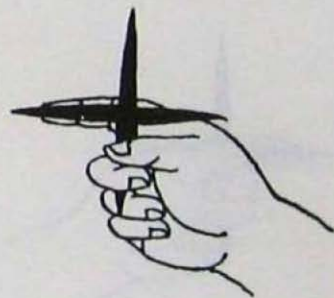
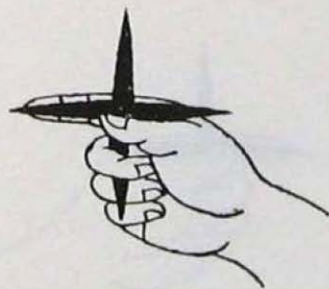
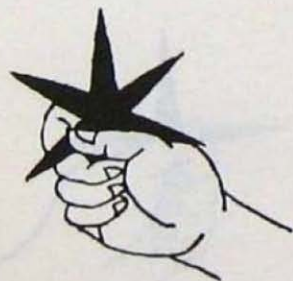
拇指で刀腹を押さえて持つ

出刃の類を手裏剣として打つときの正しい持ち方

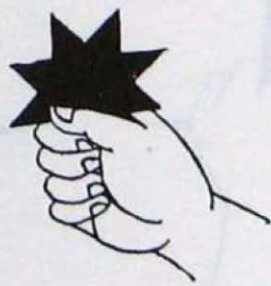
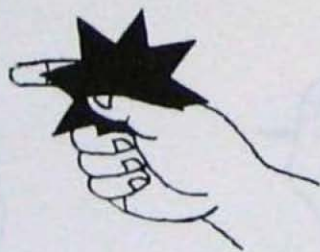
短剱

両刃の物を手裏剣として打つ場合の持ち方

四方手裏剣（普通十字手裏剣という）、六方手裏剣、八方手裏剣、十方手裏剣は、一名これを車剣ともいわれている。

縦横いずれに投げても、グルグルと車のごとく廻転しながら飛んで行き、その一角なり二角なりは必ず突き刺さる様に出来た手裏剣であるからである。

この手裏剣は、打ち方、技術も普通、棒状、針形、釘形、角形、平形、短刀形、鎗の穂形等のような、習練も要せず、かなりの遠距離でも容易に打ち立てることができるものではあるが、目標に的確に突き刺さるようになるには、やはりそれ相当の練習が必要である。持ち方によっても、飛び方に変化があり、投げ方が悪いと方向のくるいができる。その点大いに研究工夫の必要がある。

十字手裏剣を打つ場合の持ち方

十字手裏剣の正しくない持ち方。この持ち方で投げると、力弱く遠くえも飛ばず、力を入れすぎると、すぐ下方に流れる。

同じく正しくない持ち方で、的中率少なく、下方に外れ易い。

遠距離によい正しい持ち方である。

遠近ともに、的中率が多い正しい持ち方。

遠近ともによい正しい持ち方。

近距離に適する正しい持ち方。

六方手裏剣を打つ場合の正しい持ち方。

八方手裏剣を打つ場合の持ち方

八方手裏剣の正しくない持ち方、この持ち方は、力の入れようで、上下いずれかに外れる。

近距離に適する正しい持ち方。

遠距離に適する正しい持ち方。

車剣（十字、六方、八方等の）手裏剣はとかくその持ち方と打ち方（手離れ）によって、左え左えと方向がそれ易くなるものであるから、その点大いに心して、まっすぐ打つように心掛けるべきである。手もとのちょっとしたくるいも、遠くなればなるほど大きなくるいとなるものである。

　それから手裏剣はいかなる場合でも、持っている手裏剣全部を打ち尽くさず、一つは必ず手に残すのが心得の一つである。それはいざという場合に役立てるためである。

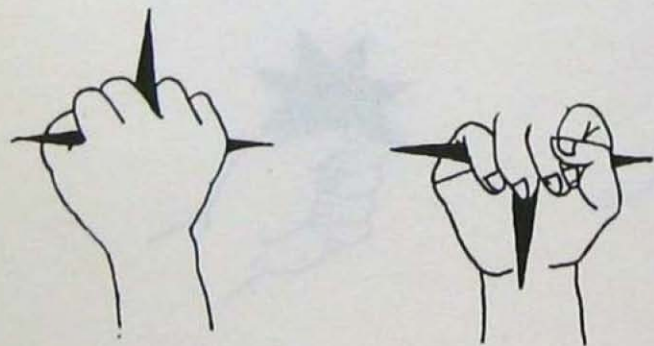
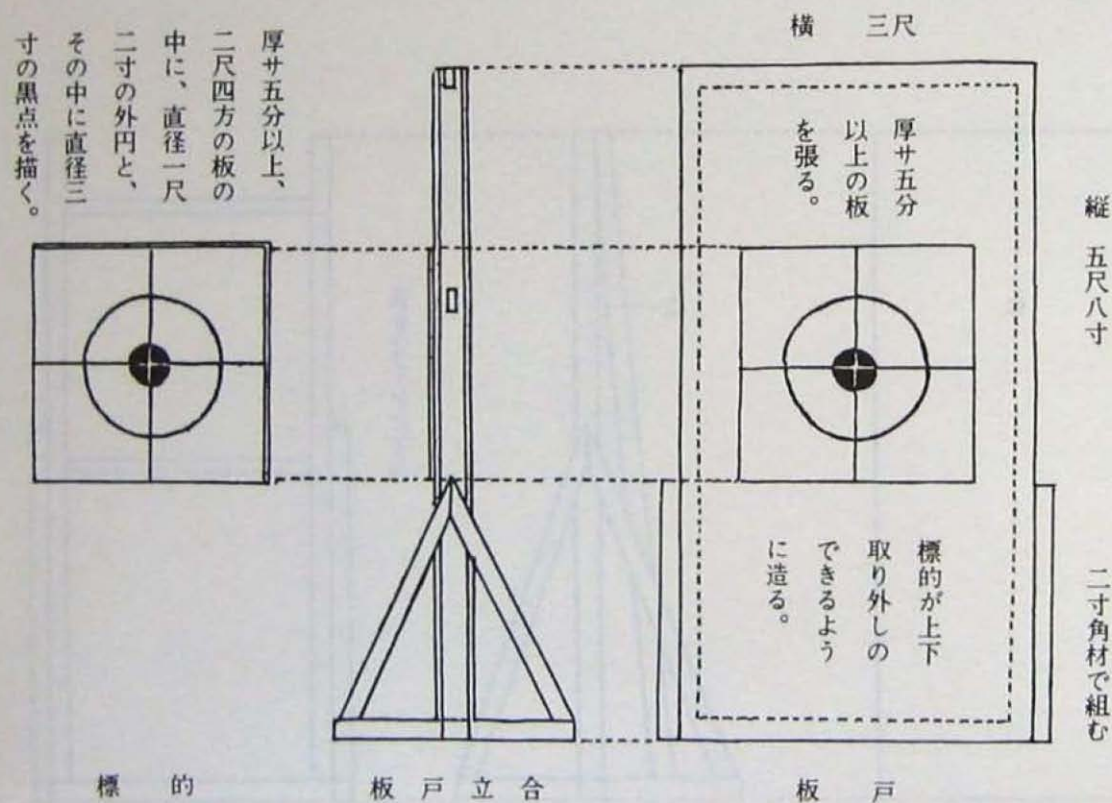
不正

正

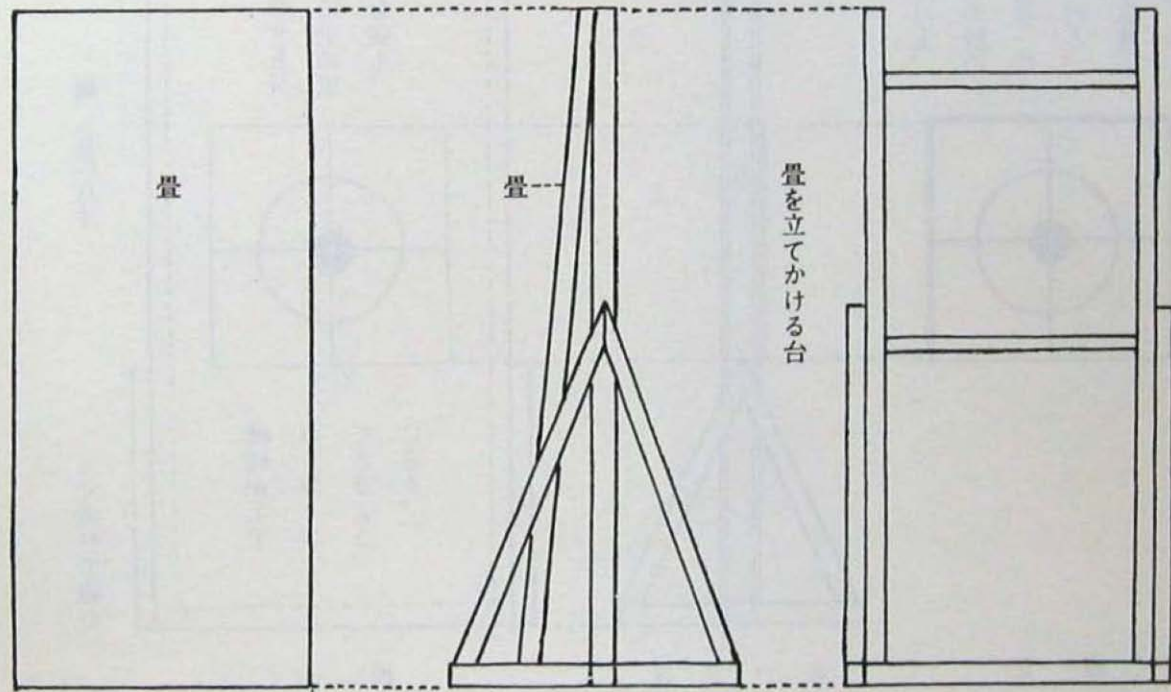
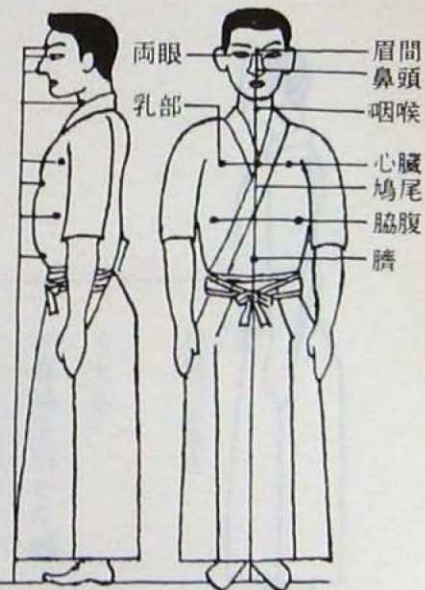
十字手裏剣は下図のように握って格闘戦闘にそなえる。

手裏剣打ち方練習法㈠（立打ち）

標的の造り方（一）

横　三尺
厚サ五分以上の板を張る。
縦　五尺八寸
標的が上下取り外しのできるように造る。
二寸角材で組む
板　戸
板戸立合
厚サ五分以上、二尺四方の板の中に、直径一尺二寸の外円と、その中に直径三寸の黒点を描く。
標　的

標的の造り方　(二)

板のかわりに古畳を用いる方が手裏剣がいたまないでよい。

寸法その他は図を見て工夫すべきである。

手裏剣で敵を倒すのに用いる部位

標的位置の定め方

練習に先だって、まず標的の位置の定め方であるが、標的はその中心部と、自己の臍とが合致するところを正位置と定め、初めは三間くらいの間隔のところから練習に入るがよい。そしてそれが正確に打てるようになったら、漸次四間、五間、六間と、その間隔を延ばして練習する。

目付のこと

すべて標的を前にして立つときの重要の心得として、目付ということがある。これは標的の中心と自己の中心とを一致させるため、標的の中心から垂直に仮想の線を下ろし、その線を自己の下まで延長させ、その線上に自己のすべての中心を置いて、手裏剣を打つ手段とする。

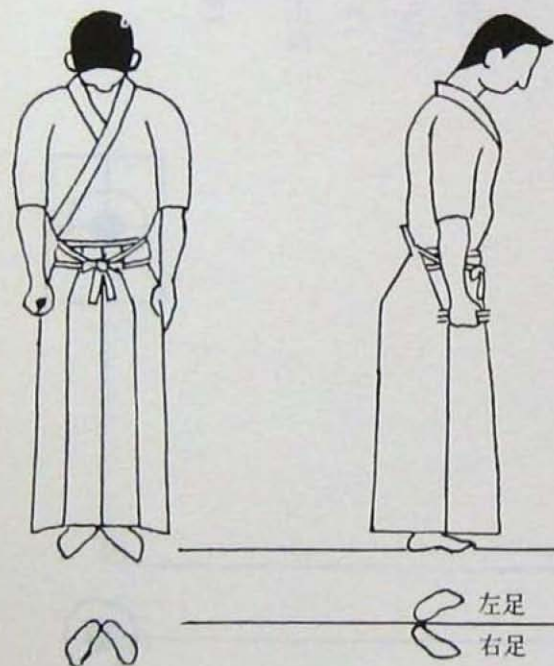
練習第一動作（卍字形）

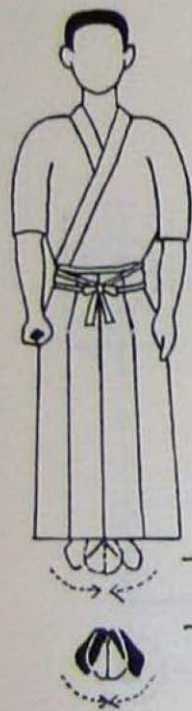
右手に手裏剣を持ち、正面標的に向かって歩を進め、練習予定の距離三間なら三間前方、四間なら四間前方で止まる。

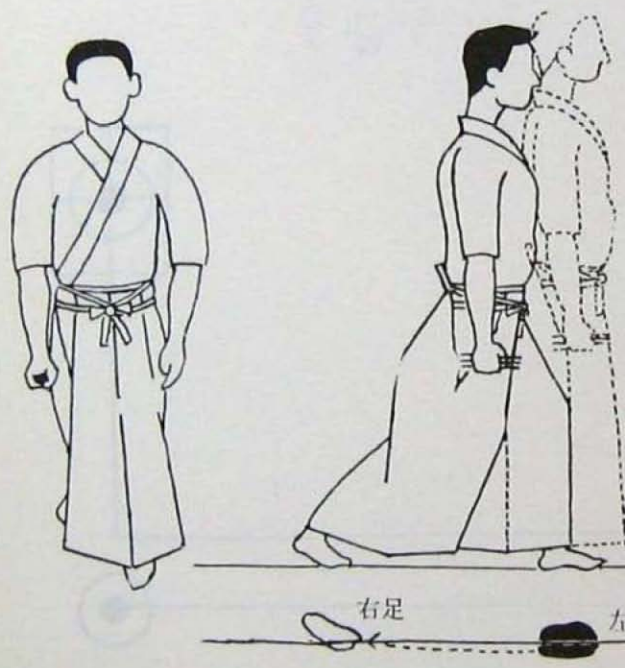
この際、手裏剣の持ち方は直打法、廻転法によらず、すべて剣尾を前にして持つのが作法である。

練習第二動作

次に練習するに当たって、仮想の対者としての標的に向かって一礼する。

これは、すべて日本武術は礼に始まり礼に終るものである建前からである。

練習第三動作

標的の中心と自己の中心とを一致させた目附けの一線を中心に、爪先を閉じる。

練習第四動作

左足拇指で線上を踏み、右足を線に添って後え引いて同じく拇指で線を踏み、構える。

練習第五動作

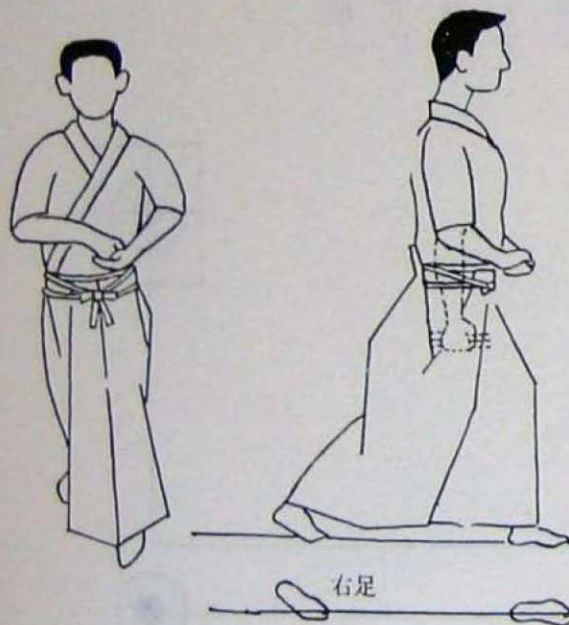
右手の手裏剣を左の手に移す。この際、廻転法の場合は、そのまま移し、直打の場合は、剣先を先にして左手人差指のところに受けて移す。

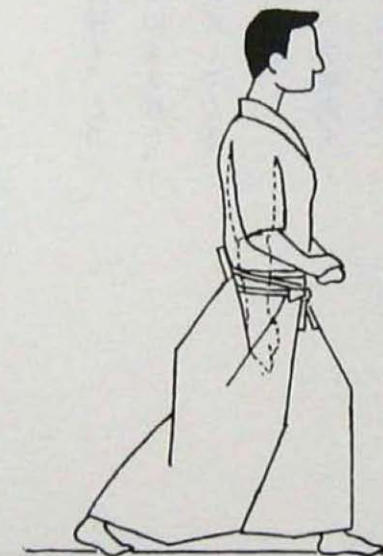
このとき注意することは、手裏剣をガチャガチャ触れ合わせたり、落としたりしないようにすることと、目は決して標的から離さぬようにすることである。

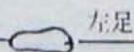
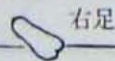
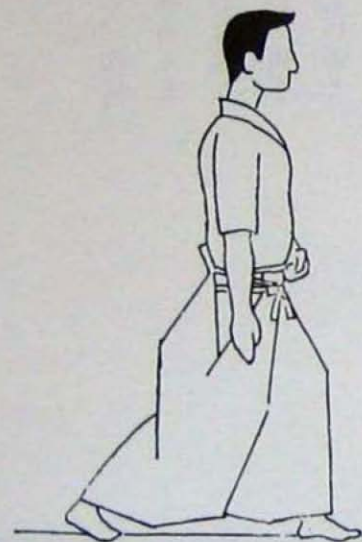
側面

前面

右足

左足

練習第六動作

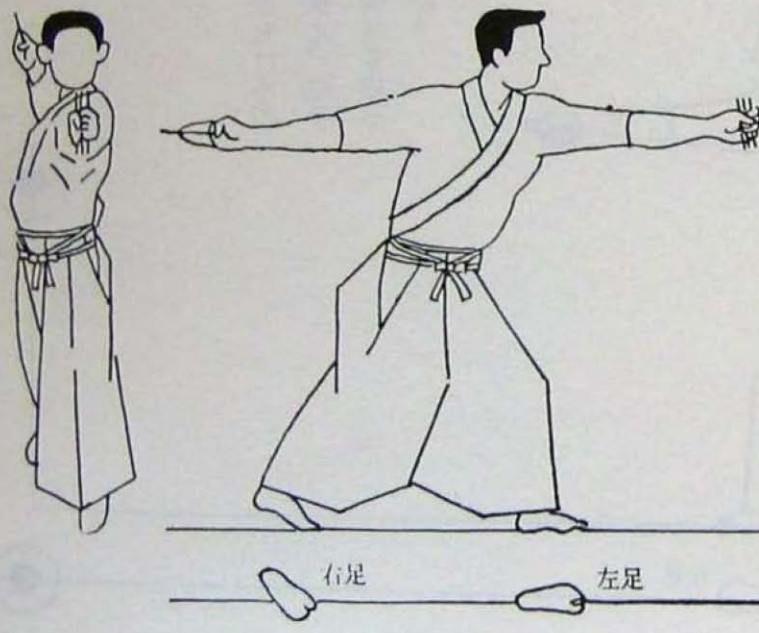
手裏剣を右手から左手に移し終ったら、右手は静かに下におろし、左手はそのまま前脇に構え、いつでもその手の中にある手裏剣が直ちに右手で取り得られるようにして置く。

練習第七動作

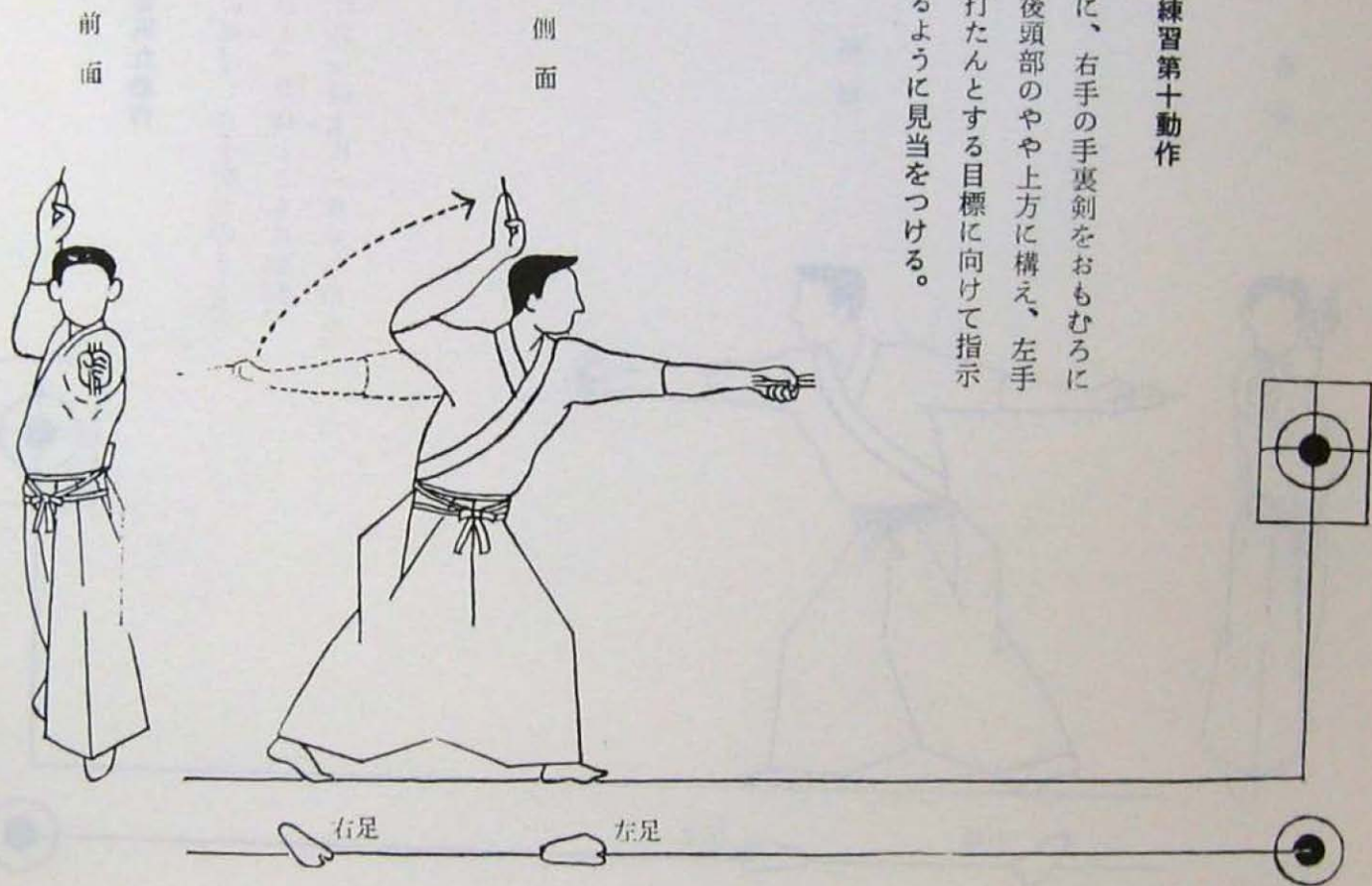
次に、左手も手裏剣を持ったまま静かに下におろし、標的と自己との中心を見定めながら、右手で左手の手裏剣をとって持つ。

練習第八動作

手裏剣を右手に持ったら、次に、鷲がまさにその両翼を開かんとするような体勢で標的を凝視しながら、身造ろい、次いで両手を左右肩と平均するくらいのところまであげる。

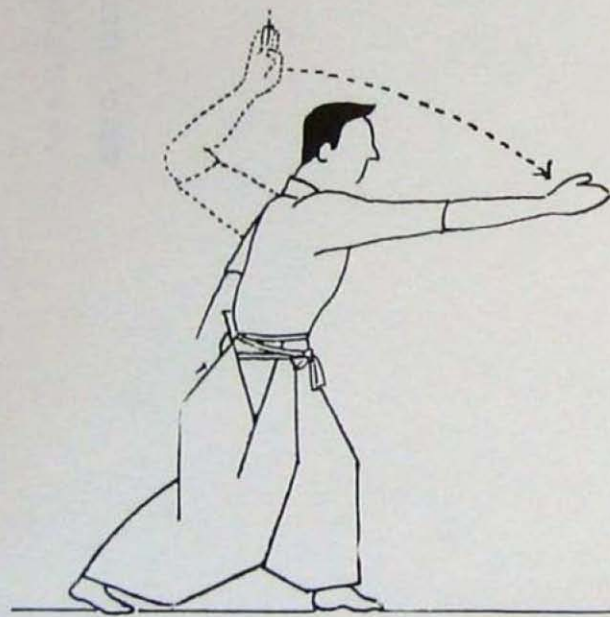
側面

練習第九動作

左右に延ばした手をそのままだから右え、身体とともに廻転、目附けの一線上に一致せしめる。

練習第十動作

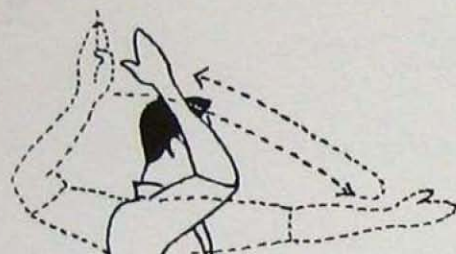
次に、右手の手裏剣をおもむろに石後頭部のやや上方に構え、左手は打たんとする目標に向けて指示するように見当をつける。

練習第十一動作

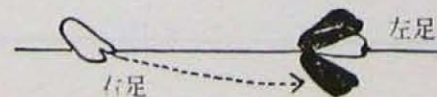
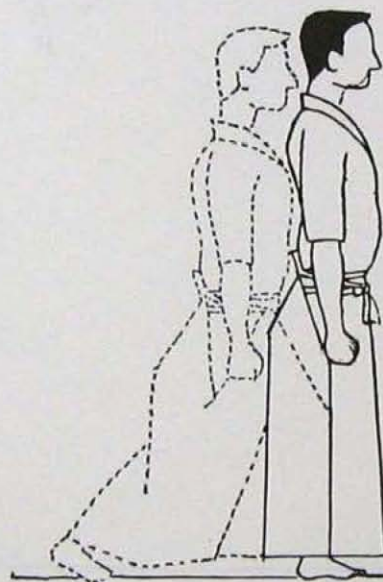
打つ。

このとき左手は、自然に後ろに引き下がるようになる。

練習第十二動作

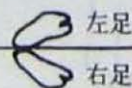
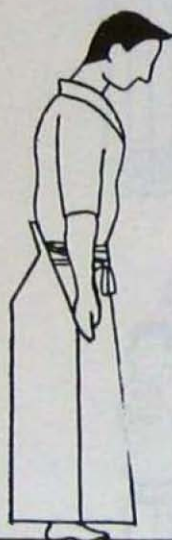
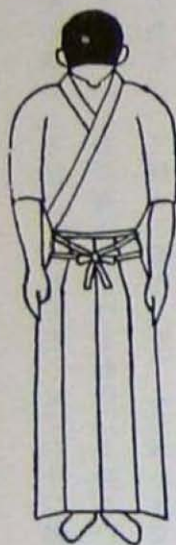
打った手裏剣が的に当たると、その打った右手は自然に右前額上方に上がる。

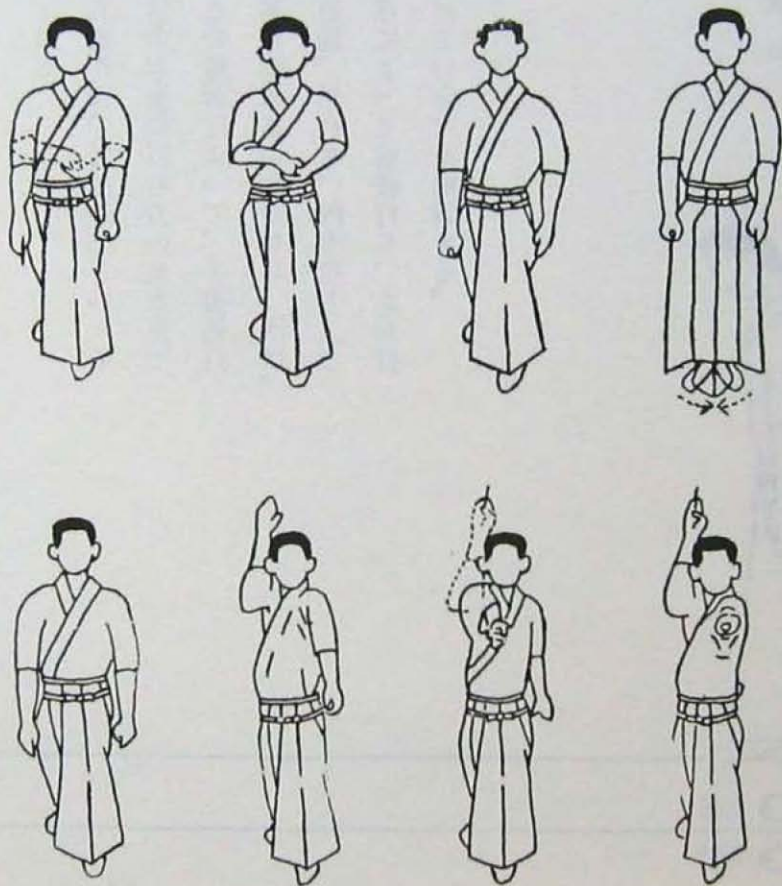
練習第十三動作

打ち終ったら、おもむろに左右の手をもとに戻し、

練習第十四動作

右足を前方に返して
最初の姿勢となり、

練習第十五動作

一礼して終る。

以上十五動作は、通称卍形といって各流共通の手裏剣打ち方の基本形である。この練習によって、手裏剣打ち方の基本的体形が出来たら、次は、刀字、直指、早打ち、四方打ち（これは流派によって前後打ち、左右打ちとわけている）を練習する。

刀字形

卍字形は、前掲十五動作の構え（足踏）から打ち終りまでの十二動作を三拍子に行なうのであるが、その中の左右に両手を上げる動作（身造ろい）を略し、直ちに左手を前に右手に剣をとって構える動作（矩）より残心までの八動作を二拍子で行なうのが刀字というのである（重複するが、図示すると次のとおり）

以上、八動作が刀字形で、上段四動作を一拍子に、下段四動作を一拍子に、都合二拍子に行なうのである。

直指形

直指形は、刀字形で行なう形をさらに略し、初めから剣を持っていて、一拍子に打つ打ち方で、左図七動作を一拍子に打つのである

四方打ち

これは、前後左右を打つ練習で、基本体形の運用動作練習である。

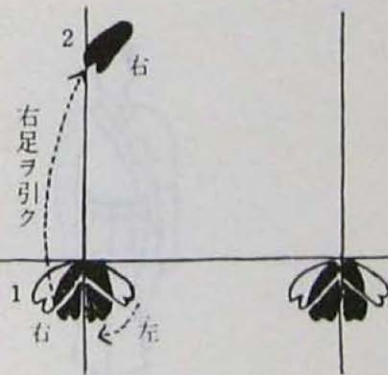
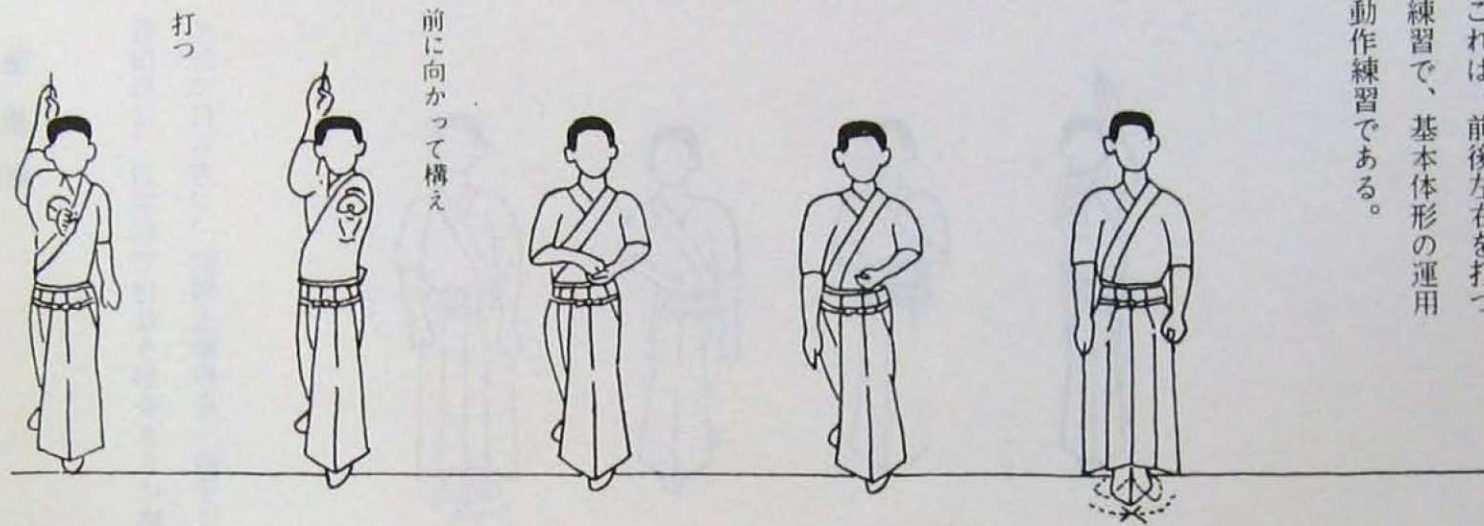
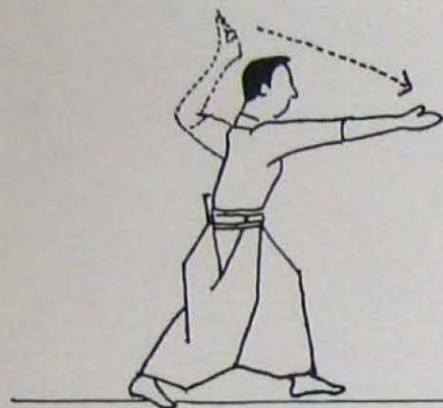
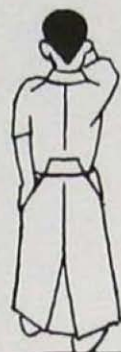
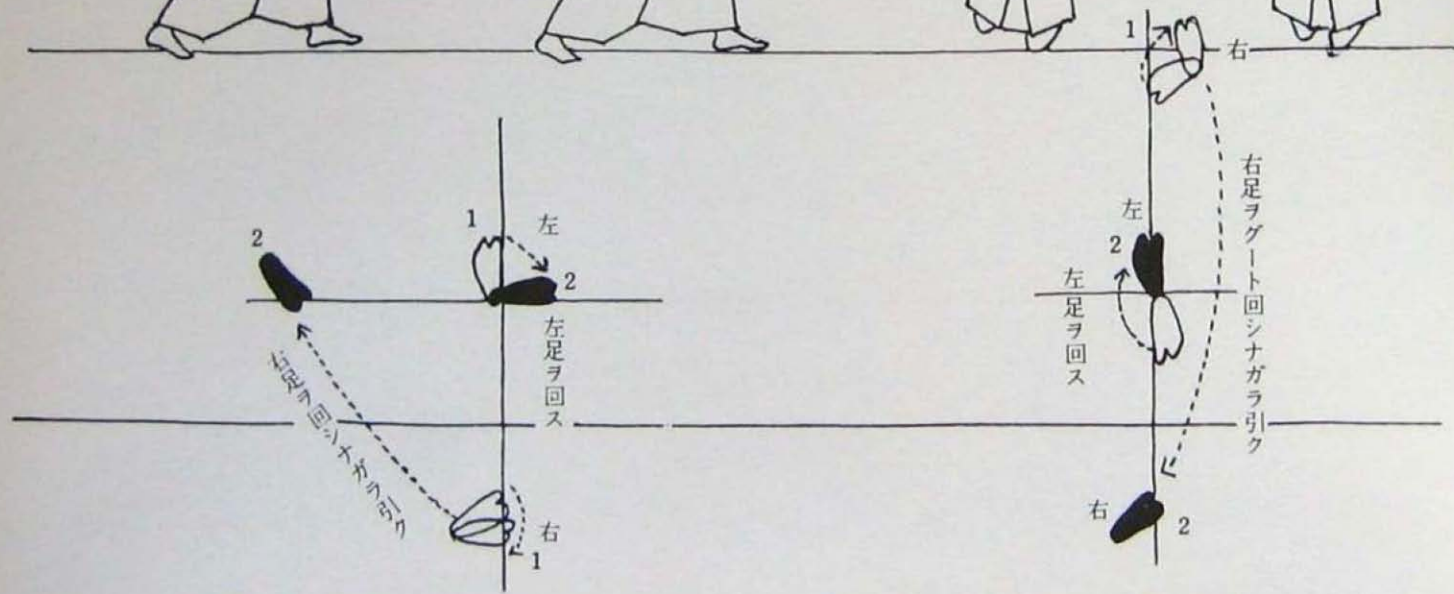
後に向いて構え

打つ

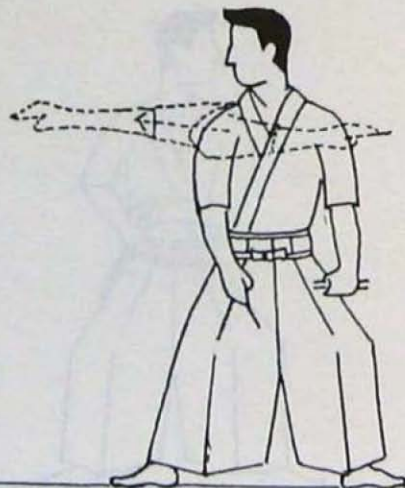
左に向いて構え

打つ

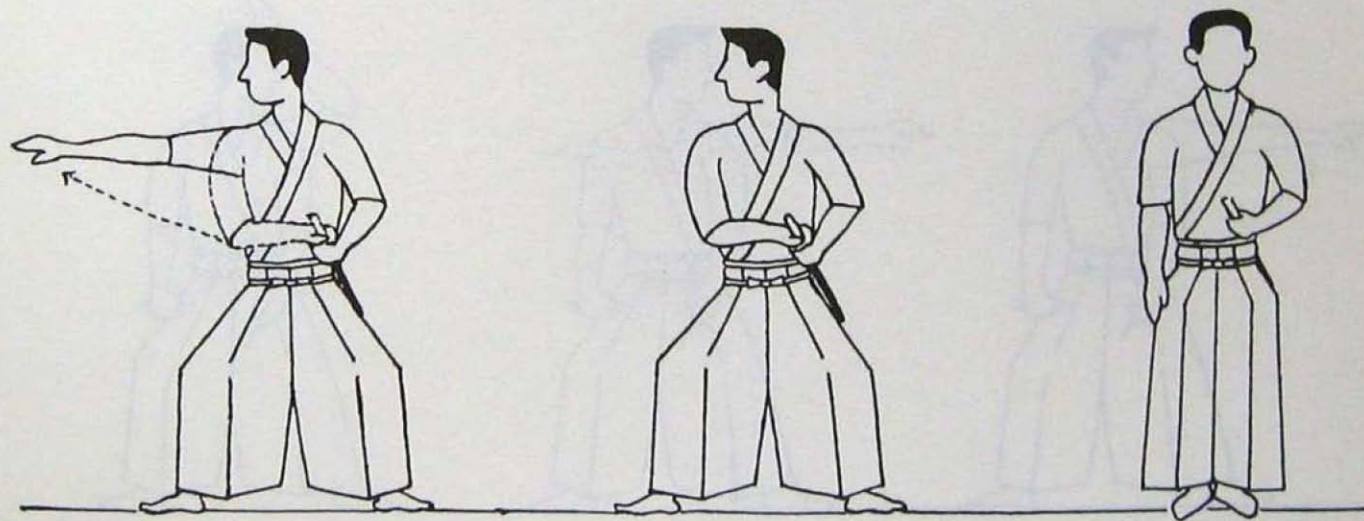
1
右
右足ヲグート回シナガラ引ク
左
2
左足ヲ回ス
右
2

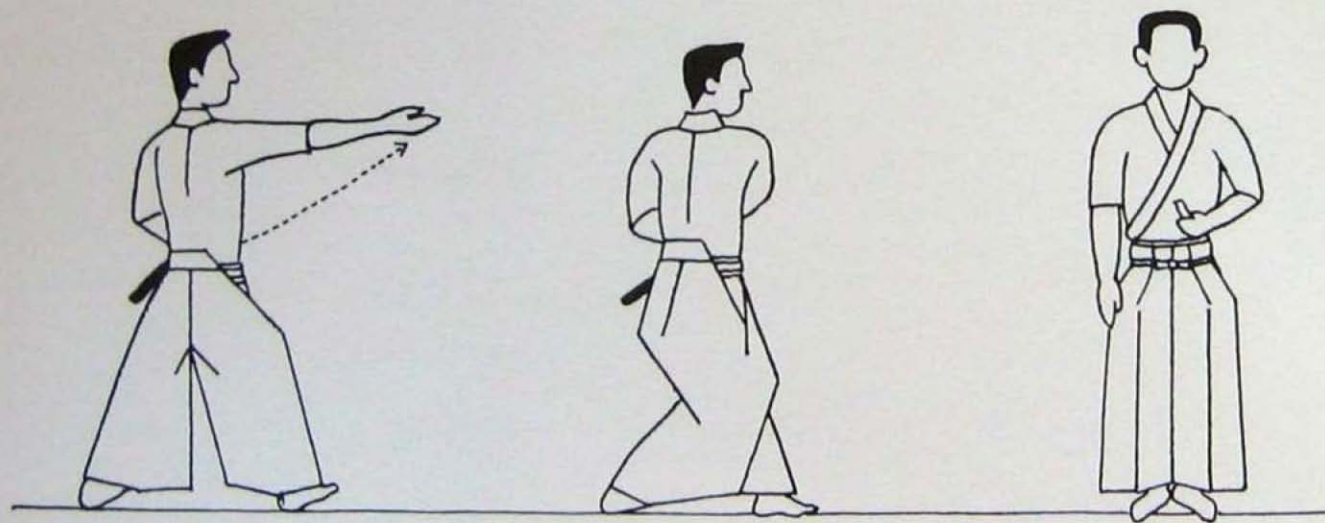
1
左
2
2
左足ヲ回ス
右足ヲ回シナガラ引ク
右
1

立打ちによる本打ち、横打ち、逆打ちの練習

本打ち

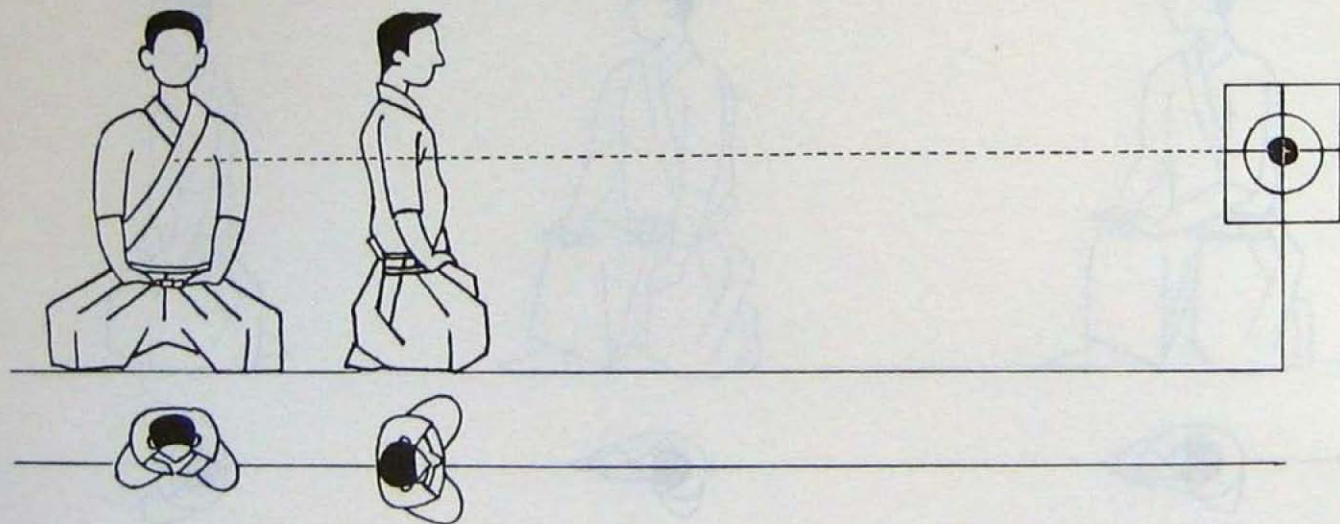
横打ち

逆打ち

歩行短剣逆打ち

歩行中、右側の敵を打つ場合の動作

歩行短剣逆打ち

歩行中、左側の敵を打つ場合の動作

手裏剣打ち方練習法㈡（居打ち）

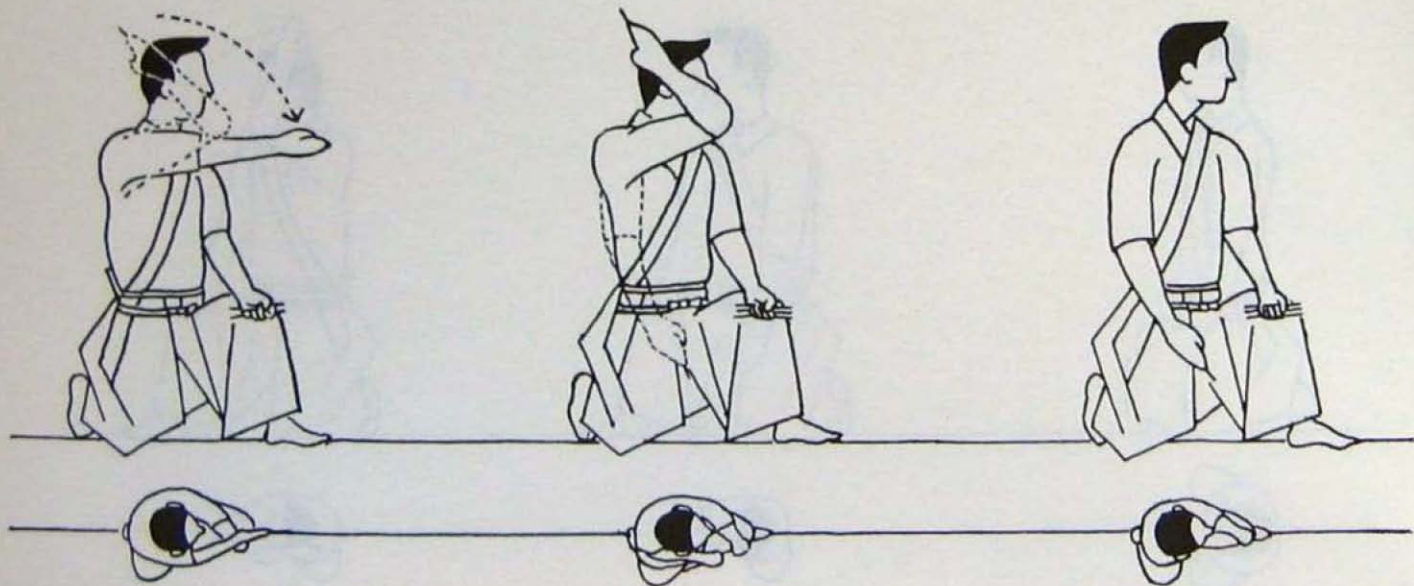
座打ち練習の標的の定め方

心窩の上約一寸くらいのところと標的の中心部と一致するように定めるが適当である。

居打ち（座打ちともいう）練習第一の形

手裏剣を左手に持って正面の標的に向かって正座。

標的を左にした横向きの体となり、左足を立膝とし、右足先を爪立て尻下に居敷き構える（目は終始標的から離さぬこと）

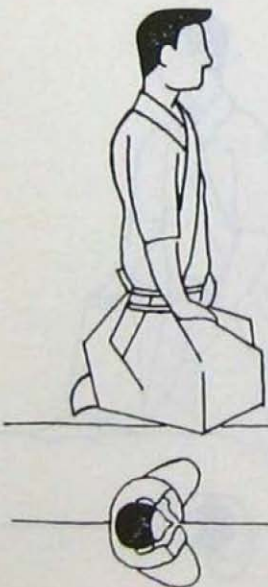
標的の中心と自己の中心とをよく見定めながら、右手で左手の手裏剣をとる。

手裏剣を持った右手をいったん右股脇に下ろし、もう一度標的と自己との中心をよく定め、

右手の手裏剣を右後頭部のやや上方に構え、

打つ。

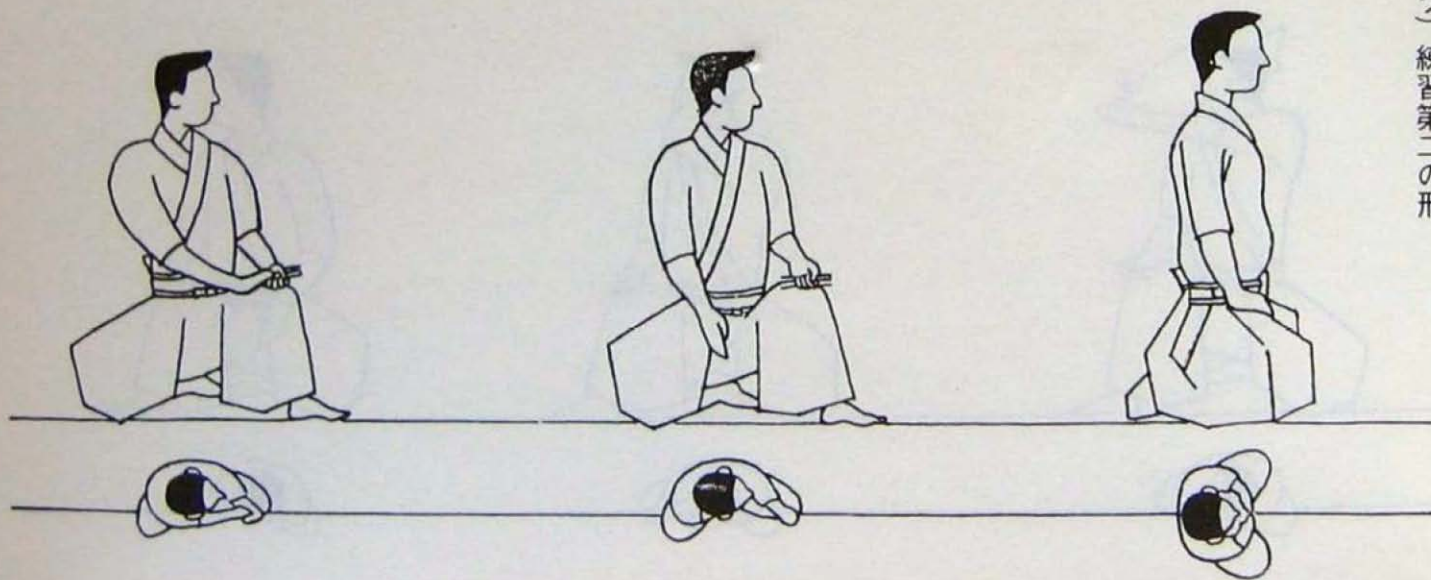
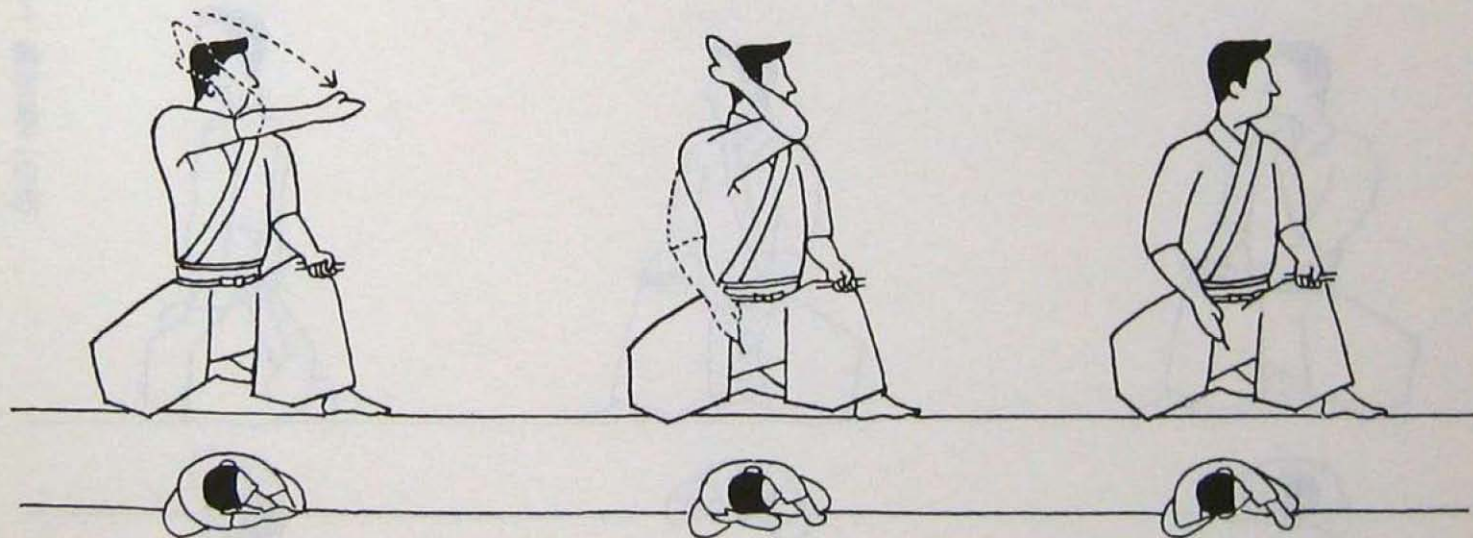
打った右手は打つ前のときのように、自然にもとの右後頭部のわきにかえる。

上がった右手を静かに下ろし、手裏剣を持つ前の構えとなる。
こうして繰り返し打つ。

打ち終ってまたもとの正座にもどる。

居打ち（座打ちともいう）練習第二の形

手裏剣を左手に持って正面の標的に向かって正座。

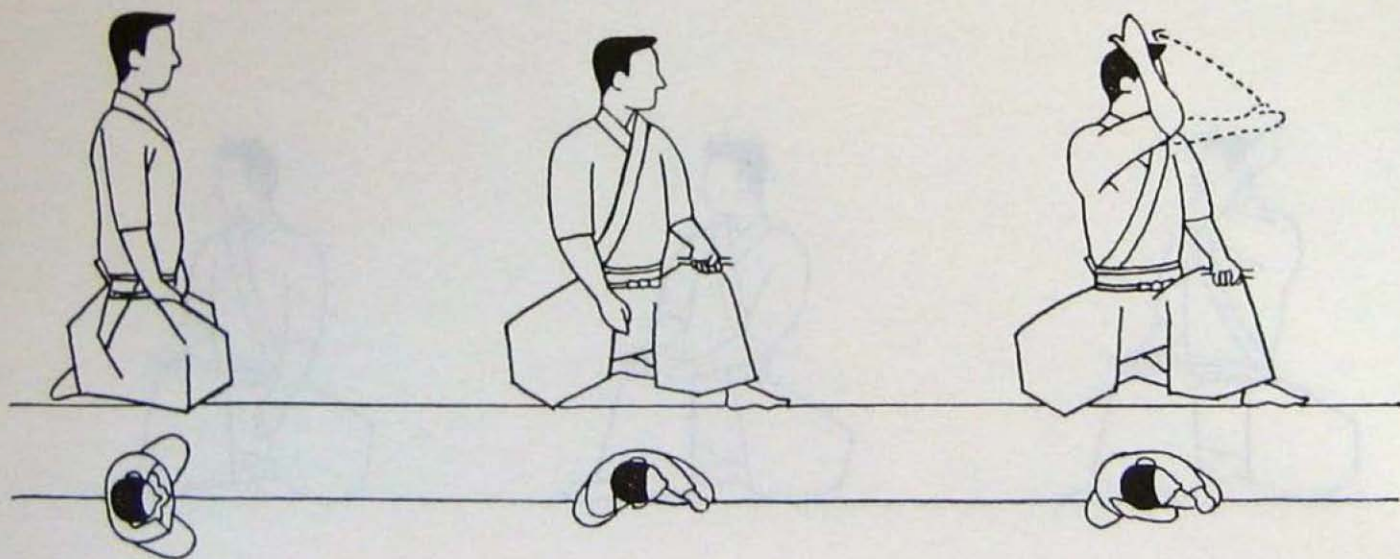
標的を左にした横向きの体となり、左足を立膝とし、右足を中に居敷いて構える（目は終始標的から離さぬこと）。

標的の中心と自己の中心とをよく見定めながら、右手で左手の手裏剣をとる。

手裏剣を持った右手を
いったん右股脇につけ、
もう一度標的と自己と
の中心をよく定め、

右手の手裏剣を右後頭
部のやや上方に構え、

打つ。

打った右手は打つ前の
ときのように、自然に
もとの右後頭部のわき
にかえる。

上がった右手を静かに
下ろし、手裏剣を持つ
前の構えとなる。
こうして繰り返し打つ。

打ち終ってまたもとの
正座にもどる。

居相前後打ち

手裏剣を左手に持って、標的を左に、左足を立膝、右足を中に居敷いて構える。

標的の中心と自己の中心とをよく見定めながら、右手で左手の手裏剣をとり、

右後頭部のやや上方に構え、

打つ。

打った右手で直ちに左手に持つ次の手裏剣をとり、

右方を横打ちに打つ。

居打ち練習

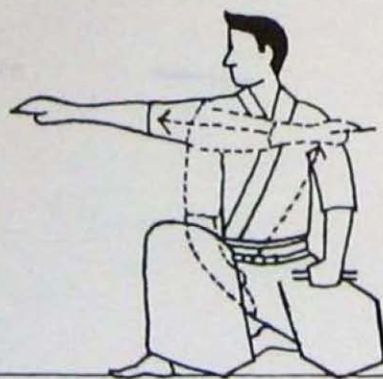
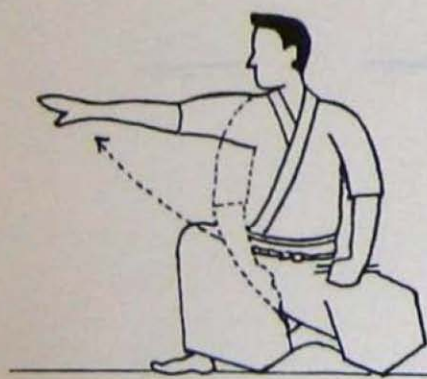
座っているとき。

そのまま打つ。

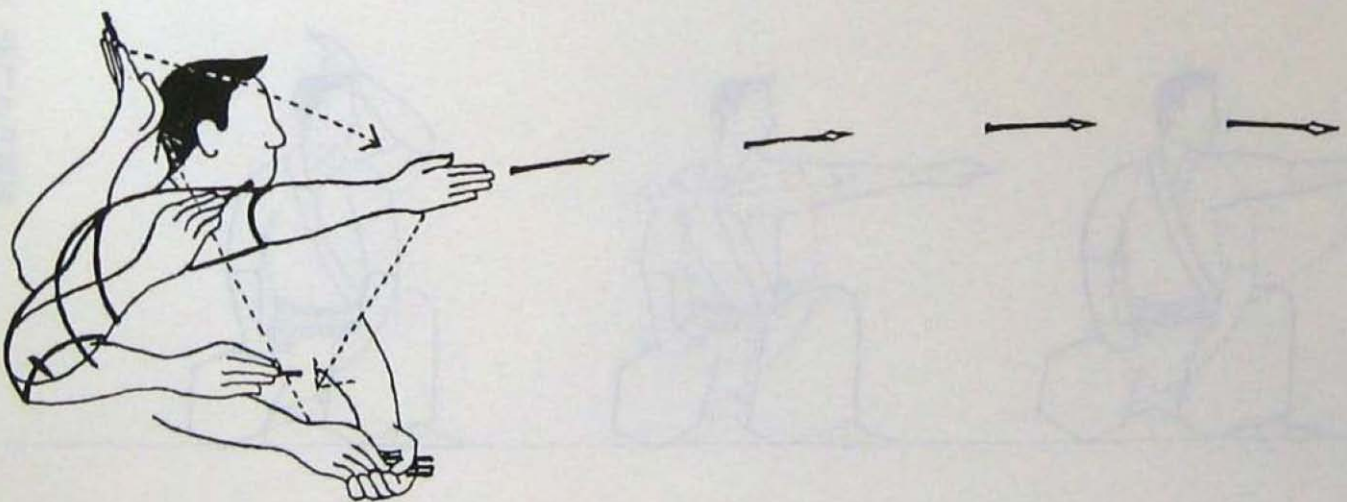
開いて打つ。

居打ちによる本打ち、横打ち、逆打ちの練習

本打ち

横打ち

逆打ち

早打ち（一気五剣）

手裏剣の早打ちというのは、最初の手裏剣を打って、その手裏剣が未だ標的に達しないうちに、つぎつぎと連続的に次の手裏剣を打つ早打業のことで、敵に前進どころか、立ち直る隙も与えぬような打ち方をする方法である。

これには「一気五剣」といって、一呼吸の間に五本は打てるだけの練習をすべきである。

刀法併用手裏剣術

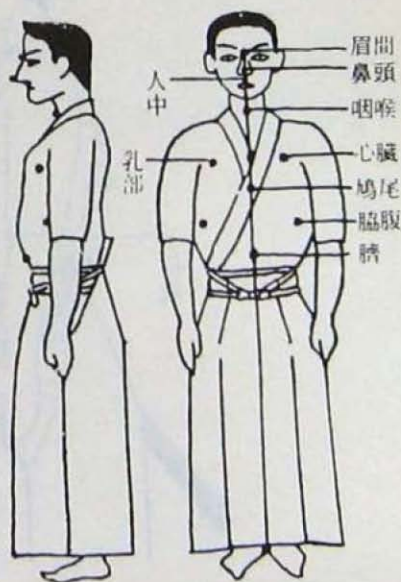
三　学

敵と我れとの間積りは五寸三間と定め　先づ身體を実直にして（體造）討つ　我が天眞より打出す時　息を詰めて打掛ける　是れを躰と手と息の三學といふ

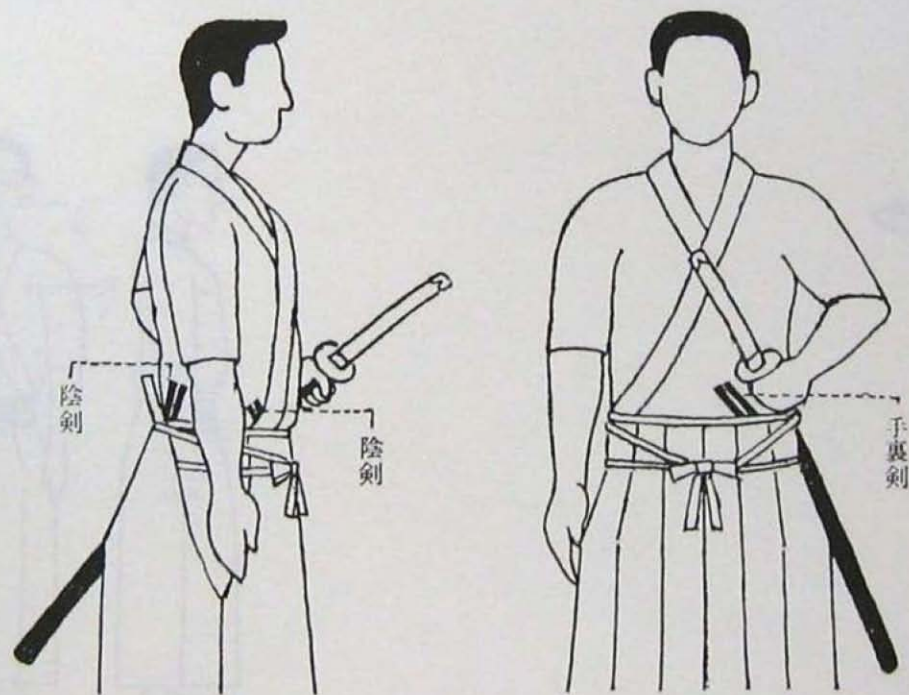
劔当の事

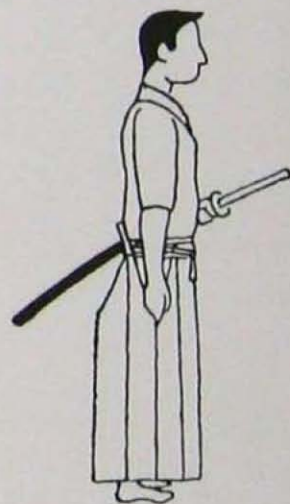
手裏剣で主に打ち當てる所を剣當と云ひ三ケ所ある　両眼（是れを二星の当りと云ひ）息下　胸中（是れを息の当りと云ふ）　両眼息下　胸中で三ケ所也

劔込之大事

手離を以って敵の躰を切る　これを劔込と云ふ　両眼の真中　鼻中の真中　息下の真中等肛脉の通りを打つ十のいと云ふ習がある

実戦に臨むときの心得

実戦に臨むとき、手裏剣は必ず、左側腹脇前に数本差し添えて持ったものである。甲賀流では手裏剣のほか、剣形手裏剣を差し添える習わしであった。また、車剣は細い鉄棒に差し持ったものである。映画演戯等でよく鉢巻のところに、手裏剣をかんざしのように差したりするのを見るが、あんなことは絶対になかったことである。敵に我が手裏剣の持数を知られることは非常に不利であるため、心得ある武士はしなかった。また陰剣といって、剣形手裏剣（普通の手裏剣でも）を右側後腰脇か右えり下懐中に隠す習いもある。

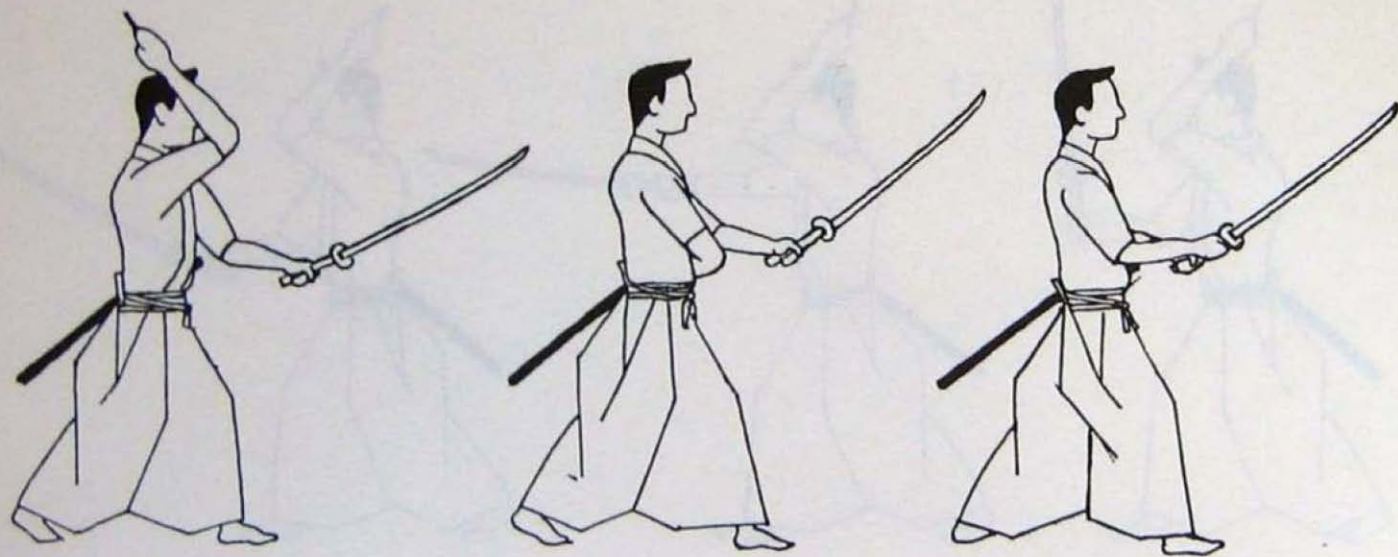
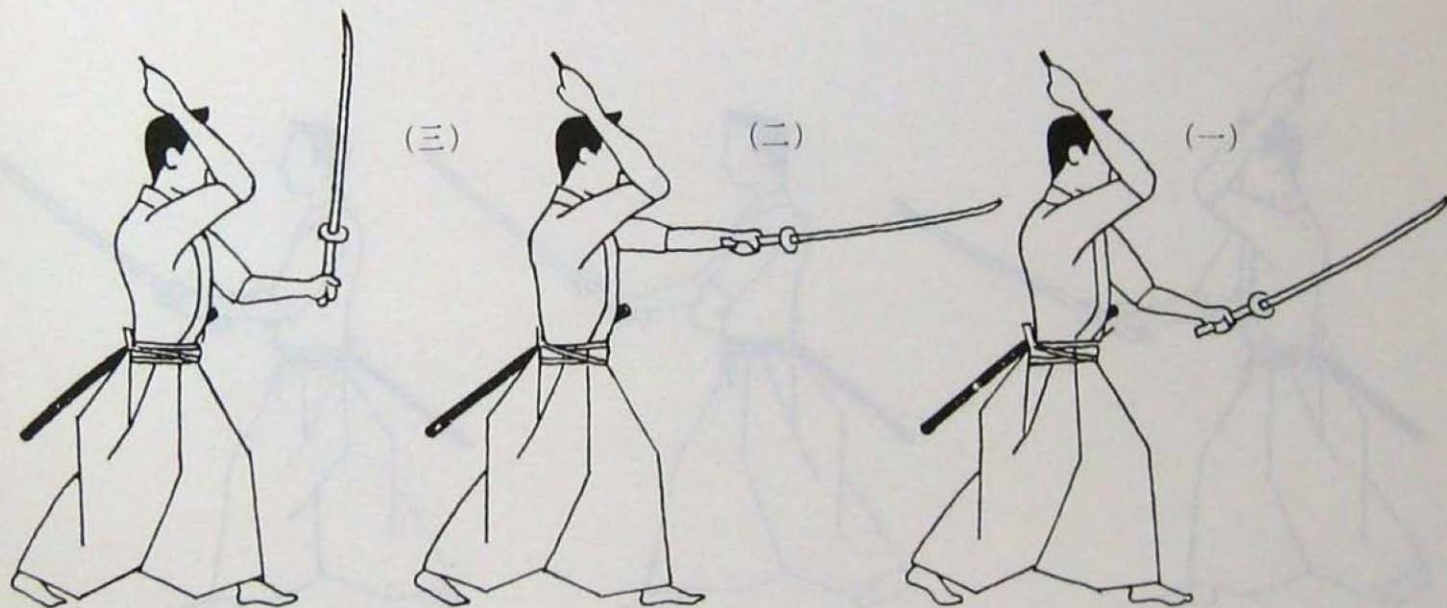
車剣

実戦に臨むときの第一

敵と相対し、

右手を柄にかけ、

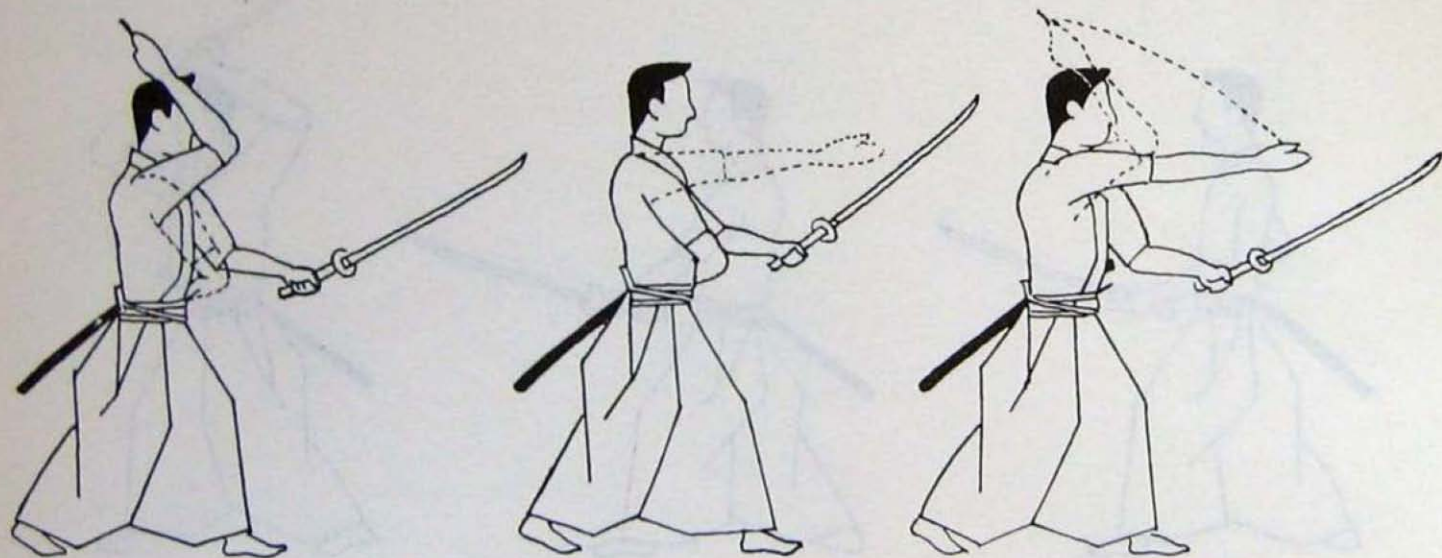
左足を後方に引きながらすばやく刀を抜き、

左手を添えて晴眼に構えると見せ、

右手より左手に刀の柄を持ちかえると同時に、右手は左腹脇下に隠くし持った手裏剣をとり、右足を一歩後へ引きながら、

右側後頭部上に打ち構えに構える。

この打ち構えの場合、刀を晴眼に構えるのと(一)突き出して構えるのと(二)垂直に構える(三)のとがあるが、そのときの場合によっていずれにても可し。

振り上げた手裏剣を打ち、

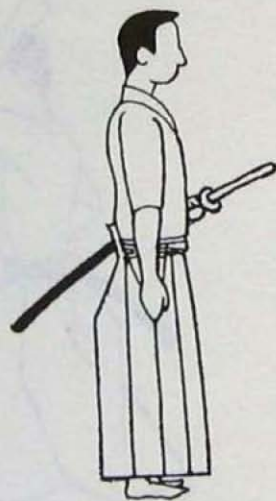
直ちに次の手裏剣を取り、

打つと同時に、

刀を上段に振りかぶり、

踏み込んで切り、

敵のようすを見ながら、

静かに納刀し、

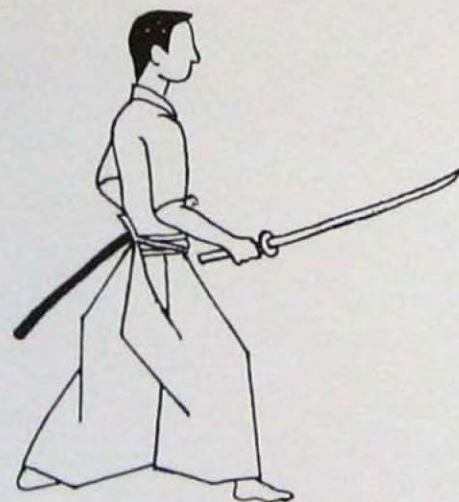
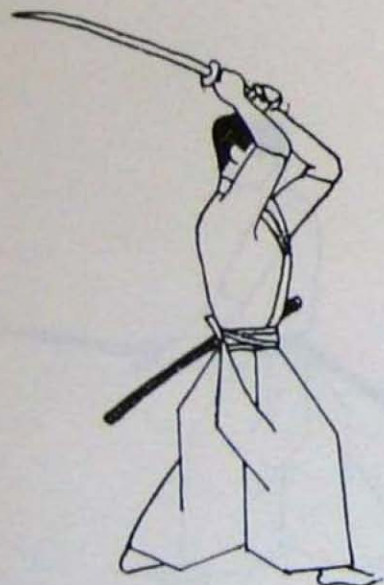
終る。

実戦に臨むときの第二

敵と相対するや直ちに手裏剣を取り、

打ち構えに構えながら敵にせまり、

打つ。

打った手は直ちに柄にかけ、

刀を抜いて、

振りかぶって、

切る。

実戦に臨むときの第三
敵を左右に受け
た場合。

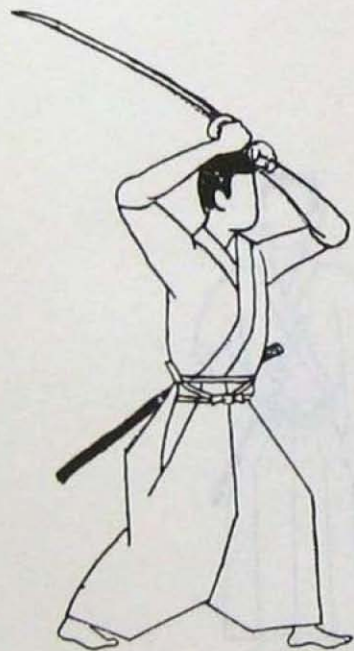
左手を鞘の鯉口
にかけ、

左右の敵を警戒
しながら、まず
左方の敵に対す、

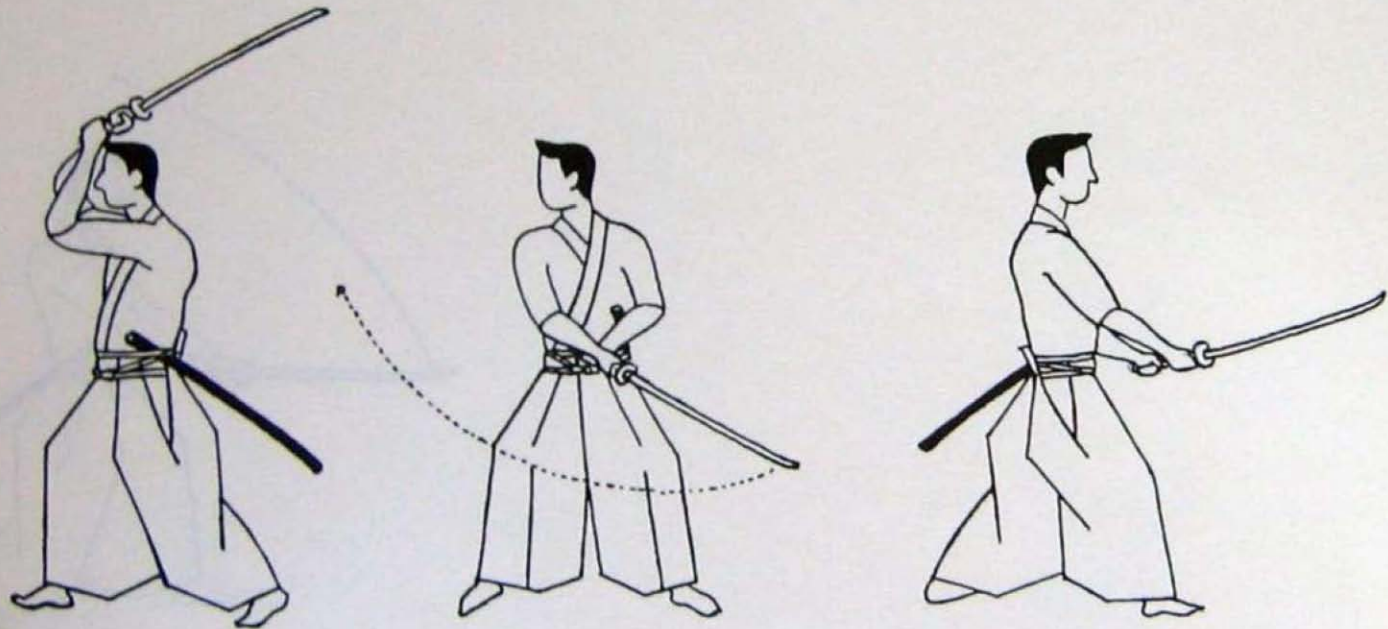
手裏剣を取るや
いなや、

柄に手をかけ、

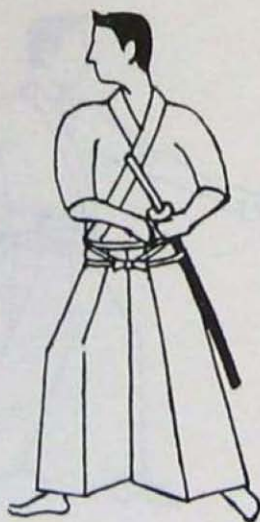
抜刀して、

振りかぶって、

切り、

右方え向きかえりながら、

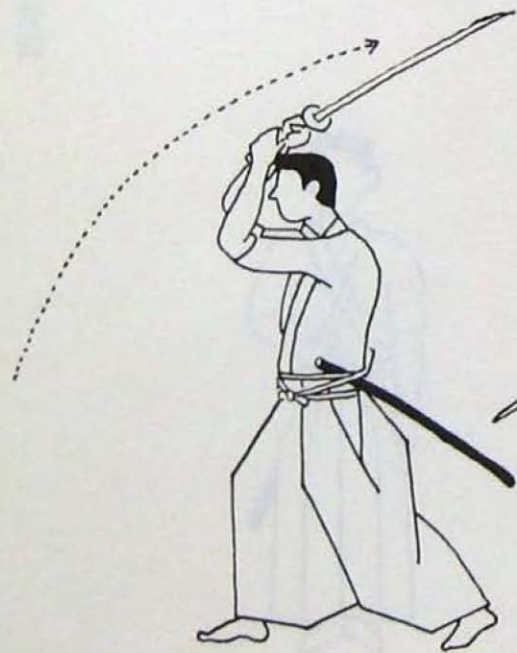
振りかぶって、

切る。

実戦に臨むときの第四
右方に敵を受け
た場合。

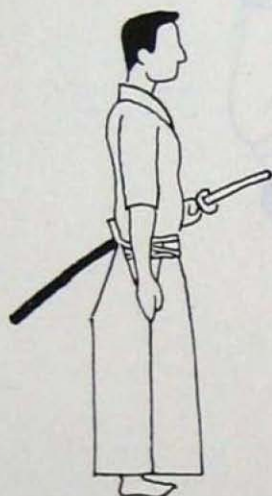
手裏剣を取り、

逆打ち、

柄に手をかけ、

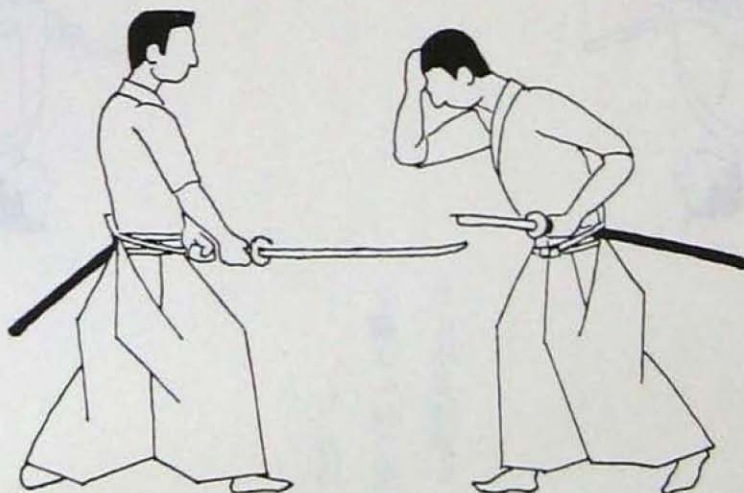
抜刀して、

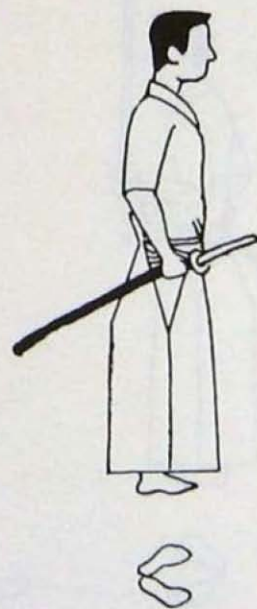
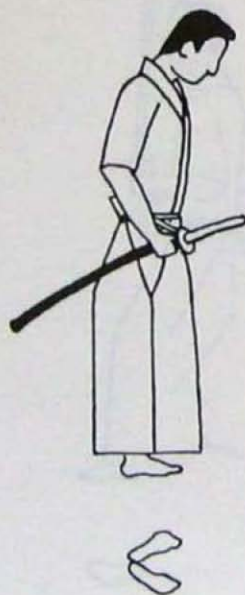
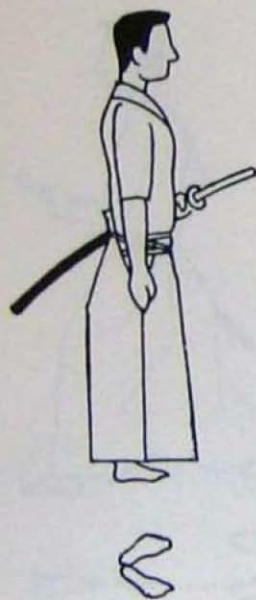
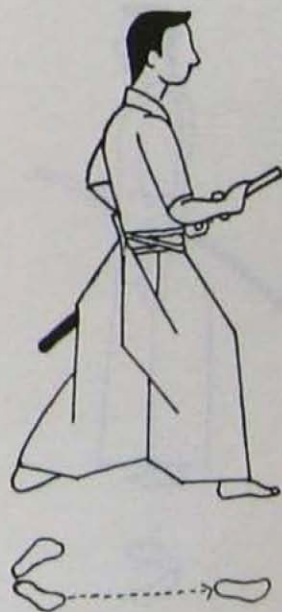
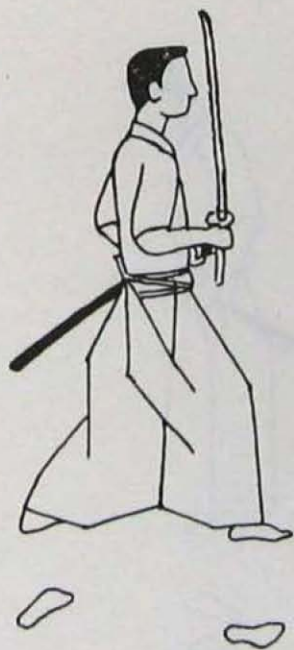
振りかぶって、

切る。

すべて敵と対するときは、常に左の腹脇下前に手裏剣を五本持つことはもちろんであるが、その手裏剣のほかに陰剣を持つことが秘伝である。

手裏剣を右手に隠し持って敵と相対し、

敵、刀の柄に手を掛けると見るや、右足を敵の目を目当てに踏み出すとともに手裏剣を打ち、手は直ちに柄にかけ、

敵がひるむところを

踏み込んで切る。

一本目

手裏剣五本を右前半に差し、日本刀を右手に提げて出る。

立礼して後、

刀を左手に持ちかえて帯刀する。

まず左手で鞘口を持ち、鍔五分ばかり離して刀の柄を握り、右足を斜め前方に踏み出し、

刀を抜き、片手八相に構え、

右足をもどし、柄と右手腕とを併行させ、右胸脇に構え、左手で鞘口を握ったまま直立して前方標的に見入る。

次に刀を左手に持ちかえて構え、前方を凝視しつつ、右手で手裏剣を一本抜き出し右手に持つ。

持ち終ったら、手を下げ、標的に向かって数歩進む。

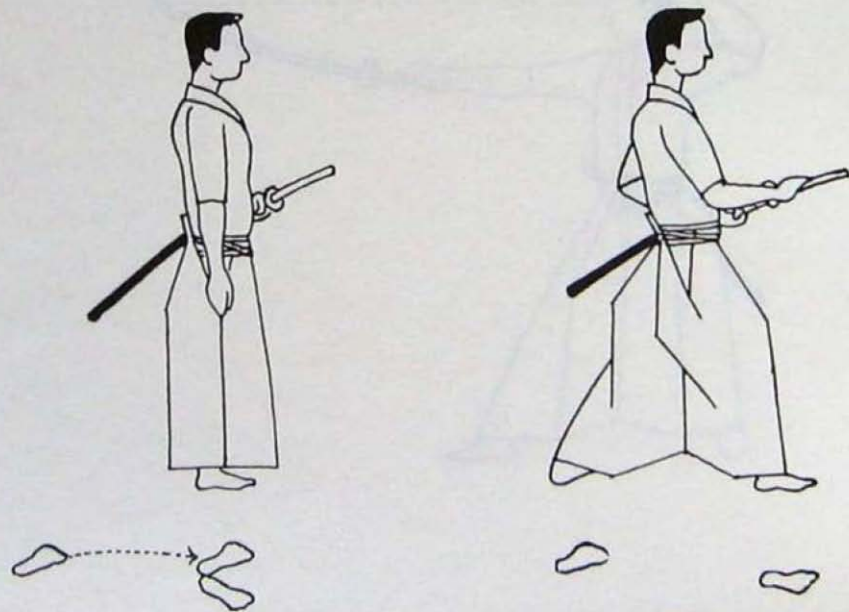
間合をはかって気合とともに左手に持った刀を左片手上段に構え、手裏剣を打ち構えにして、左半身になってじりじりと敵にせまる。

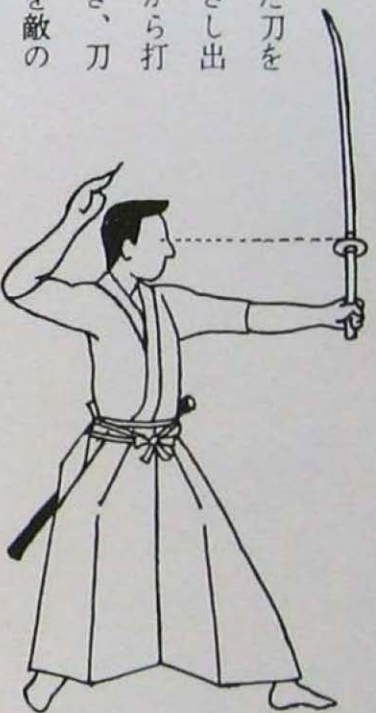
左上段に構えた刀をさらに高く構え、手裏剣を打つと、直ちに、

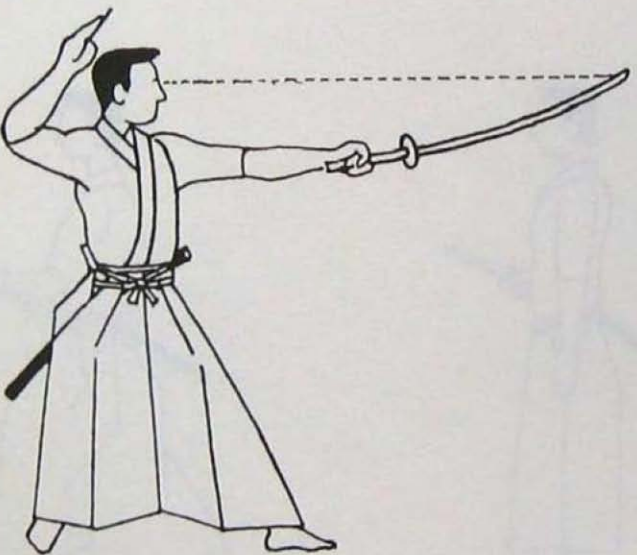
刀を八相に構える。

次に刀の切先を前方に向け、左足を斜め左後方に引き右手の刀は前方に突き出し、左手はすばやく鞘口を握り、納刀の姿勢に

しずかに納刀。

左手は刀の鞘口を握り、左足をもどし、もとの自然体となり、一本目終る。

二本目

左手に持った刀を垂直に前にさし出して構えながら打つ。このとき、刀の鍔のふちを敵の顔面、両眼の間につけて目標とする。

三本目

刀を左手に持ち、左直向に切先を突き出しながら打つ。このとき刀の切先は、敵の顔、両眼の間につける。

四本目

刀を左手に持ち、切先を前方に向けて下げながら打つ。

同じく四本目の替手

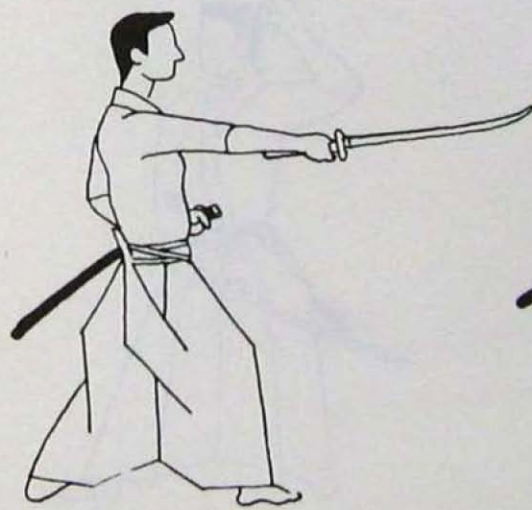
柄頭を左に切先を右に向けて持って打つ。

五本目

刀を抜かず、柄を斜前方に構えて打つ。

打ち終ったら、すばやく刀を抜いて構え、

次に切先を前方に向け突き出して後、

納刀して終る。

図解 手裏剣術
藤田西湖著作集四—三
平成五年九月二十五日 印刷・発行
著者 藤田西湖
発行者 西澤楯雄
発行所 名著刊行会
東京都千代田区神田神保町二—二〇
ISBN4-8390-0282-7